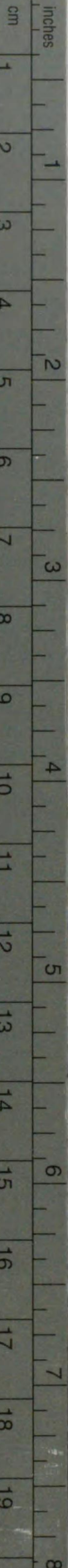


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



120
240

因伯
叢書

因

幡

誌

高草郡(下)
氣多郡(上)

卷五

02KH

大正 年十二月發行

因幡叢書

研志塾藏版

因幡叢書 因幡誌第八郡郷之部(下)

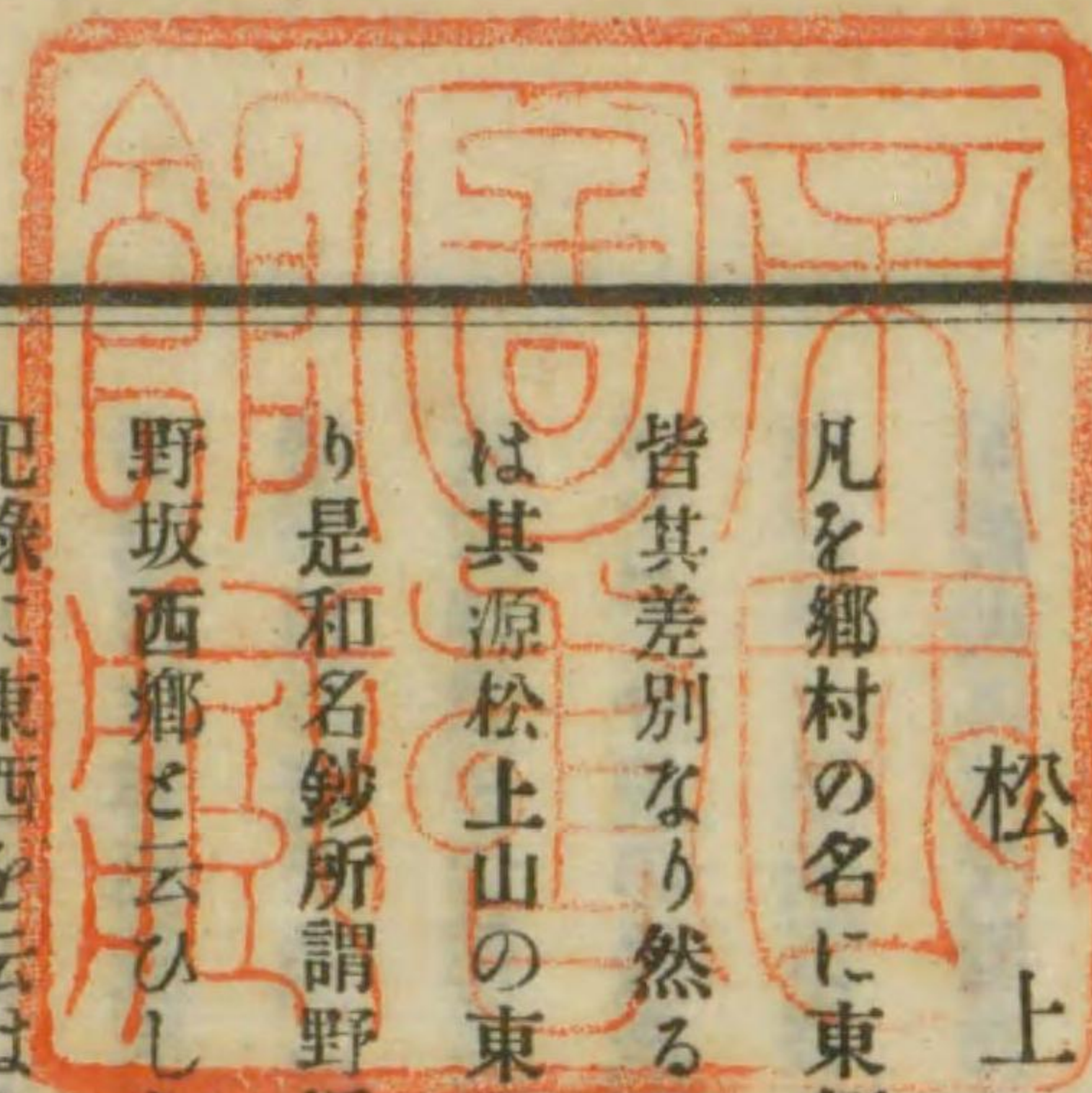
高草郡

松上西郷 (十三個村)

凡を郷村の名に東何西何と云ふは傍に同名あるに對する特稱なり或は南北或は上下或は奥或は口と云ふ皆其差別なり然るに今松上西郷有て東郷なし又有富東の郷有て西の郷なし不審と云ふべし按るに此二谷は其源松上山の東西に開けたり是を以て考ふるに建武年中松上の社の鐘銘に野坂郷松上大菩薩と彫刻せり是和名鈔所謂野坂郷是なり北谷二つなから同名相並ふを以て往昔有富の方を野坂東郷と云ひ松上谷を野坂西郷と云ひしなるべし然るに後人古名を變改し東西の文字を殘せるは其實を知らざるもの歟中谷の記録に東西を云はす只有富保松上の郷とあるを以て辨知すべし

○上原村

戸數五十九○氏神今宮大明神(祭九月九日)攝社荒神稻荷○天光山矜堂寺の廢地(眞言本寺高野山)本尊不動明王(弘法大師作今修驗三寶院一派利昌院持)○虫尾山淨源寺(曹洞禪本寺鳥取天德寺)○千疊新田○上段より一町西にあり此より奥を松上谷と云ふ松上村まで凡そ五十町也其間にカネ原と云ふ在郷あり松上の奥楨原の出村にて當村より二十五町と云ふ又上原の大五輪とて東側の民家の前にあり高さ六尺許



り故ある古墳なるべし

○松 上 村 (上段。坂根。田中)

戸數五十七○氏神松上大明神(祭四月朔日)社領二十八石祭日神供四斗八升入四俵神馬大豆一斗二升○同荒神社(祭九月廿八日)○荒神六社妙見天神○高松上○古城○衣于岩○カネ原より二十五町奥にあり但當村は上段坂根田中此三村の惣名なり村の奥南西兩谷あり南の谷に村落なし二谷ともに詰りは岩坪なり田中は大川(野坂川上流)を隔て、四五町西の谷に入込であり○松上大明神 上段より三町奥にあり祭神國常立尊攝社天兒屋根命なり此里の土俗に昔より家を建るに壁に土を塗らず茅にて垣をかこひ或は板壁を用る竈を造らす總ていみじき體をなせば神靈惡み給ふとて疊を家床にしく者も希なり是驕奢を戒め給ふ神意と言傳ふ凡そ村民の信仰他に異なりて穢氣不淨を忌むこと最甚し産婦は産室(坂根村にあり)に下して分娩の後數日を経されば其家に歸るを許さず○又村中火を改むる事嚴重なり是甲頭の役としてフルビタイと云ふ言を高聲に呼はり觸るなり其聲に應して每家よ貯る火を消し新火に改めて用をなす固より舊火にて炊置たる物を食せず是敬神の風俗なりと扱此フルビタイと云ふ言何の意たるや考難し或説に舊火を絶せよと云ふことならんと云へり左あるにや又衣干岩と云ふは當村と上原村との間の川の中にある石なり石の大き陸地より見る所凡そ二間餘り常は畧水面とひとしく纔に水上に出つ是を衣干岩とも袈裟岩とも云ふ昔叡山の座主野坂長者の爲に鬱憤を抱き再び京に歸らず此山奥に入て寂滅せり其頃松上山

は草木生茂りて路を塞く座主此川脈をつたひ上りける時あやまつて水中に轉ひ衣濕けるを此石の上にて乾かしけるとぞ此阿闍梨は慈惠僧正の弟子にて某の王子にて御座しけるとかや後其靈魂を祀り松上大明神と崇けるよし州民の口碑にて慶安年中當社鐘の銘にも其趣見ゆれど社傳記録を考ふるに本社は國常立尊攝社天兒屋根命なり素より祭日に神輿二基を振渡すあれば二神を祭る事疑なきもの歟中古神佛習合の法行れて以來實事を失へるものならん疑らくは阿闍梨此山に入滅の後末社の神として祭れるを後世誤傳して云へるにや近代史學廢れて事の實考へ難きこと率ぬ斯の如し又坂根村の下大川岸に馬場松あり昔松上明神祭禮の時此所にて流鏑馬ありし跡と云へり

○横 原 村 (小原。カネ原)

戸數 ○氏神阿地拜大明神(祭日九月九日)。荒神四神。稻荷。山神。神國隆寺地藏(在小原村辻堂)○産物割木○松上西谷の奥にあり田中より十二町とす小原と云支村十二町奥にあり兩村共に薪の名所に木長短く割木となして束ねたり専ら國中に交易す○國隆寺地藏 小原村の辻堂に安置す長二尺五寸餘木像也寺跡は小原村の後の山上にあり字治拾遺物語に曰今は昔因幡國サカノ里に伽藍あり國隆寺と名く此國の前國司チカナリ造れるなり其處の年よりたる者傳へて云ふ此寺に別當ありき家に佛師を呼て地藏を造らす程に別當か妻こと男に語らはれて跡をくらまして失ぬ別當心を感はし佛の事をも佛師の事をもしらで里村に手を分けて尋ね求むる間七八日を経ぬ佛師も檀那を失て空を仰き手を徒らにして居たり其

寺の專當法師是を見て善心を起して食物を求めて佛師に喰せ纒に地藏の木作り許りをたてまつり彩色をば得せ其後此の專當法師病につきて命終り妻子悲み嘆きて棺よ入なから捨てずして猶之を見るに死して六日と云ふ日未の時許り俄に此棺はたらく見る人をお恐れ逃去ぬ妻悲みて見るに法師よみ返りて水を口に入れ程へて冥途の物語りす大なる鬼ふたり來て吾を捕へ追たて、廣き野ら行くに白衣さたる僧出で鬼ども此法師とくゆるせ我は地藏菩薩なり因幡國國隆寺にて我を造りし僧也佛師等食物をくつて日比へしを此法師信心を發して食物を求めて佛師等を供養し吾像を造りたり此恩忘れかたし必ゆるすべき也と宣ふ程に鬼ども赦し畢ぬ念頃道に道を教て返しつと見て生返りたるなり其後地藏菩薩を妻子と共に彩色を供養したてまつりあからく歸依しけるに今此寺に御座しやすと云々按るにサカノ里は地藏菩薩利生記に野坂里に作れり建武年中松上社鐘の銘に野坂郷松上と彫刻あれば往古此邊野坂郷内にして土人口碑にも國隆寺の地藏と云傳へたり尤も古作殊勝なる佛軀なり其時代を考へ難し因幡の前司チカナリと有て其姓氏知れず文字も亦詳ならず地藏利生記に介親に作れり是も國史に見へず公郷補任を按するに一條院の御時藤原實成と云人あり内大臣公季公の一男あり永延年中從五位下より立て後朱雀院まで都て四朝一條三條後一條後朱雀に歷仕し正二位に叙し中宮大夫とあり勅授帶劔兼太宰師是等の人なるにや但し諸國任をふるも雖も因幡守たる事見えず補任脱漏せしか其他に求むる人なし此人ならば今に至て八百年に餘れり星霜久しく火失の難を免れ今に此村に存在し玉ふ不思議と謂ふべし近年村民相議し京都の佛工田中淨慶に彩色再興

の事を談しけるに佛工是を拜觀し是凡作にあらずと云て固辭して遂に彩色を加へすと云へり

○河内村

氏神山王(祭日九月十三日)荒神。山神。稻荷。○根本山正福寺(眞言本寺鳥取圓城院)○流荒神。岩。古城○小原より十二町奥にあり松上谷の詰り也土俗に野坂の河内谷と云へり野坂は舊き地名にて和名抄にも出たり考ふるに今云ふ有富東郷松上西郷とは往古野坂郷の東西を分たる事分明也是より奥に至て岩坪村あり松上砂見兩谷の突合にて當村より一里なり○流荒神河内より川の南大山葵谷の山上にあり是も文祿の洪水の時此山奥より荒神の禿倉流れ來りて今ある處に止まり玉ふ故流れ荒神と云ふなり○古城小原村の向ふ鰐谷口と云ふ處の上にある山なり土俗蛇山と云ふ民談記に松上城山秀吉公番手とあるは是なり天正の初秀吉公當國手遣の時播州より八東へ越へ若櫻の城を追落し荒木兵太夫を入置き小畑越して知頭用の瀬にかゝり磯部兵部太輔を景石の城に留め置き其より高草に入りて砂見谷を過ぎ石坪より山越に此所を経て氣多の鹿奴の城へ通路ありし時往來の絆として此山に番兵を置玉ふ其時の普請なり或説に秀吉公番手の城は岩坪村の上の有りと云ふは民談記を讀て其土地に至らず推量の説也

○岩坪村

戸數百二十○氏神坪大明神(祭日九月十一日)○砂見社。稻荷。荒神。○當村は松上砂見兩谷の切詰の境にて河内より一里奥より其間に鰐坂と云難所あり松上村より南の谷を行けば一里也村より東に越

れば上砂見一里八上の曳田谷北村へ一里其間坂道四十八曲難所にて牛は通れず馬は通らず是を栗谷坂と號す道谷小治田村へ越を笹尾坂と云ふ二十五町也當所を岩坪と號するは村の奥に飛泉あり其瀧坪の形岩石圍て壺の如し即ち呼て里名とす其上に祭神あり坪大明神と號するも其故なり

○細見村 (口細見)

氏神山王社(祭日九月十三日)攝社。山神。權現。稻荷。山王○慶應山西光寺(曹洞禪本寺鹿奴雲龍寺)

○當村は松上の西の支谷にあり但し奥と口と二村あり其間二十町許り奥細見より松上村へ十五町是をしる谷越と云ふ又吉岡湯村へ山路一里餘口細見より也奥細見より矢矯村へ山越八町許也

○尾崎村

氏神三社權現(祭日九月九日)○荒神○口細見より下にあり上原と河内川を一名野坂川隔て、東西に相對

す土俗尾崎とは袁上山の尾崎と云ふの義なりと云ふ當所土民に吉岡將監被官の者の末葉多し

○大塚村 (大永寺)

氏神小冠大明神(祭日九月十九日)○攝社。稻荷。山王。權現。八幡。○大將軍。荒神。○北野天神舊

跡。旗指社○小原山大永寺舊跡○吉岡將監之墓○尾崎より下にあり上段村と野坂川を隔て、東西に相

對す村より(此間原本數字缺)大永寺と云ふ出村あり昔小原山大永寺と號する寺有し由舊此處本村にて其里の名

を大塚と云ふ今の太塚村は其出村にてオホツカと呼ひける也然るに中古の兵亂に大塚村は斷絶して出

村許り残りけるが其後大塚より出作して彼古寺號を呼て大永寺と云ひけるとぞ○北野天神舊跡並旗指

社 當村傍爾野阪より吉岡湯村道七八町行けば道より左の田の中に小高き林あり昔此所に北野天滿宮を

勸請したる迹と云へり今も田の底より朽ちたる柱をよと出る所ありと云総して此邊山も田も北野と云ふな

れば往昔は餘程の構にてありしからん又二町許行きて路の側に紙ヨリなど結ひ付たる叢林あり是を旗指

大明神と云ふ永祿六年布施の屋形山名彌次郎豐數叛臣武田高信か爲に多治見にて討死し玉ふ其の時旗指

の下部此所まで落のびけるが遂に敵の爲に討たれける其死骸を埋めたる所と云ふ其後往來の人に崇あり

しとて村民之を神とし祀りしなりとよりて此處を旗指。又は旗竿とも云ふあり又村民口碑に是は下部の

墓にあらず其時敵兵旗を奪ひ逃去らむとせしを山名家歴々の武士之を取返し此所まで持來りしが大勢に

取捲かれ遂に自殺したるなりとも云ふ近年旗指の茶屋とて民家二軒ありしか今は無し○小原山大永寺舊

跡 大塚出村大永寺の藥師堂其舊跡なり此寺昔は十二坊ありしと云其境内今に残りて大なる構なり何れ

の世に頽廢せしか佛閣等跡形をくありしに本尊藥師は残りて小堂中に安置しありし由然るに慶長元和の

比とかや後の山崩れ懸り彼堂も佛もともに土中に埋りけるを其後里民其邊を耕すとて彼佛像を掘出しけ

るよし其頃奇特なる一僧ありて是に莊嚴を加へ茅屋に安す今の草庵是也明和年中更に罌口一箇を掘出せ

り○吉岡將監之墓 大塚村より一町許離れて北の山端にあり山名を小林と云ふ將監防巳尾の城落去天正九年

の後藝州の毛利家へ赴かんと上方街道へ出けるが智頭郡に秀吉公の關所ありて智頭驛の下今關屋坂と云ふ通り難く用

瀬村に水口氏と云ふ郷士あり將監か鞆なるに因て其家に留り居けるか水口氏其後零落して大塚村に八町許りの所持の田地ありしかば其を頼りとして此里に來住す其時將監も同居し後遂に病死せり故に此村に墓を築きけるとぞ水口は後百姓となりて今に相續して分藏と稱す其因縁にて將監の刀槍を所持しけるが近年身上薄くなり野坂村の源三と云ふ百姓是も將監由緒の者にて刀は彼か家に持ける也水口は舊公家の末孫と云へり何の世の事にや左遷せられ當國に住居したるありと

○野坂村

氏神國冠大明神○牛頭天王○遍照山光明寺(淨土本寺鳥取一行寺)○修驗福性院(三寶院派)同眞性院(同上)○御制札場○囚獄○センチラの大木○吉岡將監倉跡○大塚より六町許下にあり本高より十九町之間也其間に野坂川あり廣さ八間歩渡りす鹿奴への本道なり御制札場なり獄屋あり野坂は和名抄に出たる古き地名也今云ふ有富東郷松上西郷は住古野坂一郷にして其東西を分たる也近代古制すたれて當所のみ野坂と云ふは上世野坂郷の野坂村と云ひし舊名の残れるあり當村に吉岡將監倉屋敷跡と云所あり村の中間程東側源三と云百姓の居宅地是なりと又庭前にセンチラの大木あり圍四尺餘高三間許りセンチラは一名シヤシヤキと云ふ珍らしき大木也

○桧間村 (古記桧城に作る)

戸數十五○氏神牛頭天王○鍋山○野坂より八町餘北の山下にあり村の下の峽を西へ通れば布施村へ

近道也○鍋山城 村の上にあり普武内大臣當國下向の時此山に鍋をすゑる法美郡飯山には甕を置玉ふと云へり城は近世天文十四年山名左馬介誠通布施在城の時但馬の山名と申悪く數度合戦ありしが布施の要害の淺間なりとて鳥取の城を初め所々に砦を築きける時此山にも斥候として出城を構たる也とぞ天文十七年但馬勢不意に起て布施に攻入片端より火を掛けしかば城忽ち焦土となりぬ此戦に屋形誠通討死ありければ幼稚の子息兩人を介抱して暫く當城に假居したりしと此時のを布施申の歳崩れと云傳ふる也今大間村の山下に駒繫きの松と云があり彼二人の子息源七郎彌次郎當城にて的を射られ時其召馬を繫きける故となり或は彌次郎多知見に討死し玉ひし時放されし馬を繫き置きたりとも云ふ民談記に大間鍋山と書れるは此山の事ならん

○大間村

戸數十(古記に二十軒)氏神松上大明神○古城駒繫松○桧間より四町北の田の中にあり村より四五町後の山に大松一本あり桧間鍋山の此を是は永祿の昔山名彌次郎豐數討死の時馬を乗放て此松に繫きしと堀て下手の山也て土民も是れを伐らす駒つなぎ松と云傳ふ今に至て凡を二百三十年圍一丈八尺又此山つゝきの下に城跡あり是も布勢の砦と云ふ

○島村

戸數十七○氏神松上大明神攝社稻荷。牛頭天王。荒神○松島大明神○大間村より東野坂川の側にあ

り古海より野坂への往還道に當る當所古記には今島れ保と記せり島村の今の字を畧して呼ぶならん又三才圖會因幡國の下に松島大明神松島村あり社領十五石と記せり按るに今國中に松島村と云ふを聞かす若し此村の事なるにや村の上外れに氏神社あり側に古松あり神木とす圍一丈五尺高二丈余三段に分れて其枝上より四方に垂れて地に接し又上に揚る氣勢あり社前にある長枝十二間余一株にて宛も森林の如し俗呼て島の松と云ふ想ふに神號及び里名諸書松島と記せるは此神木によるもの歟又神號昔長田大明神と花表の額にありけるが近比松上大明神と改號す其故を知らず

高松の庄 (三個村)

○三山口村 (出茶屋アリ)

戸數三十六(内十六軒茶屋)○氏神荒神(祭日九月二十八日)○觀音堂○名産鮎○野坂村より二十二町五十間西の谷にあり但し谷の口湯吷坂の麓に出茶屋あり此所鹿奴への本道にて此坂より吉岡湯村へ十四町と云ふ大塚へ廿町也○觀音堂 村の中にあり本尊長七寸七分五重の臺座舟後光なり背上に銘あり箕上山潮音寺と彫刻せり是は昔吉岡將監箕上山在城の時山内潮音寺に安置せし佛像也然るに天正の初箕上山城を防已尾山にうつせるとき近縣荒田村に庵宇を建て之れに安置す近代正徳年中別封成徳院君號壹岐守仲澄君御信仰に因て鳥取へうつし玉其後宮谷村に潮音寺を再興有て寺領二十石御寄附なされ本尊を安置し玉

へり成徳君御逝去の後其寺衰廢しける間本尊を鳥取興禪寺に遷しけるか年歴て後當村伊八郎と云ふ農人興禪寺に乞ひて此庵に安置せり舟後光五重の臺座厨子等は成徳君御再興にて其座光は今に荒田村の草庵に残れり近世因幡順禮三十二番の札所なり佛像裏下の銘に曰く吉岡將監所奉事之如意輪大悲像安阿彌所造也命佛工清水榮富重加修飾者也正徳四年五月令辰臨濟正傳寂潭叟 右六行に之を書す興禪寺寂潭和尚筆作なり

○荒田村

戸數十八○川役二石三斗○氏神天王社(祭日九月十三日)○觀音堂(箕上山潮音寺舊迹本尊安三山口村因幡順禮三十二番札所)○湖山池の南端にあり三山口の茶屋の後を北へ山越の道あり七町なり東は高住村へ八町西は松原村へ十七町なり古記に荒田の保とあり按に姓氏錄荒田は人の姓なり高魂命五世孫劔根命の後を荒田の直と稱す上世故ある地名なるべし

○高住村 (徳尾村の廢地)

戸數五十○川役十九俵一斗二升○氏神天神社(祭日九月二十五日)○諏訪大明神舊迹○天王社舊迹○不動明王○荒神○大日堂舊迹○奔宮夫婦松舊跡○大龜山禪源寺(臨濟禪本寺鳥取龍峰寺)○藥師堂本辻堂也○青島○湖水生産。鯉。鮒。鱒。鰻。蝦。鼈此外數種又水鳥多し○荒田村の東八町池端にあり青島は當村に屬す池の漁獲多し村の向東南の田圃の中に往古徳尾と云ふ村ありしと諏訪大明神は當時徳尾村の氏神

かりし由天王社大日堂の跡も皆其村の内なりと云へり何の世の事あるにや今高住村は徳尾村絶て後れ新村と云へり近年大塚村の神主 氏今の氏神天神社の幣師にて受領の爲京都へ上りける時吉田の神帳には高住も天神社の事も記文なし徳尾村氏神諏訪大明神とのみ記録分明なりしとぞ然らば古は徳尾を本村とし高住は支村ありしなるべし

湯の郷 (四個村) 今増湯谷爲五個村

○吉岡村

戸數百十八○穢多村九軒○氏神新宮大明神(祭日九月二十三日)攝社妙見稻荷別社荒神三社○中峰山寶泉寺(曹洞禪本寺鳥取天德寺)○藥師堂(修驗三寶院一流)○安樂院○御制札場○御茶屋○温泉一ノ湯。二ノ湯。中ノ湯(以上鍵湯)龜井殿湯。入込湯(二坪)瘡湯。馬湯以上八坪○古城趾袁上山○土產木地屋細工物。下駄。笮箕。白柿。つみ柿。大根。蕪。薪○三山口の茶屋より十四町湯此坂を越て西にあり村の下二町許に穢多村あり鳥取より湯所迄二里半鹿奴への本道也鹿奴へ二里又湯村より御熊村へ二十二町餘湯村は温泉有て四時繁昌也村の中に小川通りて民家兩側に軒を並へ浴客諸方より集り繁昌せり湯脈不冷不熱清潔にして香少く諸病に効有り就中瘡毒を治する靈効尤も連かなり此湯出生の時代知かたし相傳ふ今の荒湯と云へる入込の側に老たる柳の樹ありて其株の朽たる坑より始て湯脈を發しけるなりと今に

其湯井を株湯と云へり其より次第に湯池の數多くなりしとぞ○一の湯 西の山手に寄てあり是は國守の浴玉ふ湯なり○二の湯 一の湯の東に並へり以上禁湯鍵湯と云ふ○龜井殿湯 二の湯の東に隣れり是は天正の末より慶長年中まで龜井武藏守殿當郡主の時の禁湯なり今は入込湯とす○荒湯 此湯は少し東に離れて河岸にあり入こみ湯也此湯室の東口に小さき湯壺あり是温泉起源所謂株湯なり○中の湯二壺 荒湯の下十間許りにあり上手は鍵湯とす下手は入こみなり○瘡湯 村の下外れにあり二壺に仕切りて惡病の者と穢多との浴室とす○馬湯 是は荒湯の下流かり浴室なし 此外内湯とて二ヶ所民家の内にあり中島屋角屋今皆湯中屋構とす ○御制札曰 一留湯に家中徒若黨下々入申間敷事附惡病の者制禁の事 一他國の輩は不及申湯治の面々留湯の鍵無滯廻可申事 一湯賃一七日壹人五分宿賃七分たるべき事 一湯屋の内并町中無懈怠そうじ可仕事 一宿借し候儀兼約の日限の外三日は可相待三日過に於ては餘人へ借し可申事 一湯治の輩喧嘩口論有之刻は所の者出合扱可申事 一他國の者に對し所のもの不禮仕間敷候然上は喧嘩口論仕候共理非等同の分は所のもの可爲越度事右此旨可相守者也寶曆十年七月 日○御制札の外此地に定まれる錠 一入込湯油代一夜壹人壹文づゝ 一木賃壹匁貳分 一旅籠貳匁 以上

○湯谷村

戸數七○氏神新宮大明神(在吉岡村)○惣佛阿彌陀堂○湯村より四町許り南の谷にあり此谷は東は細見谷西は洞谷との間より湯谷とは湯脈此谷より傳ると云へり當村舊吉岡の出村なりしが近比租税を分

て別村となれり此里の土俗に民家に内佛を祭らず村の内に一草庵を建てそれに阿彌陀如來を安置し是を惣佛と崇て信仰せり

○妙徳寺村

戸數十五○氏神沖の舟大明神(祭九月廿九日)末神松上大明神。荒神。稻荷○湯谷村の奥四町許東側の山際にあり東に山越の路あり口細見村へ八町西は洞谷村へ三十町なり村の名妙徳寺は古寺號なり其寺何の世に顛顛せしか時代知れず又山號も傳はらず

○双六原村

戸數十三○氏神荒神(祭九月廿九日)末社山ノ神○藥師庵(吉岡村寶泉寺持)○ 妙徳寺の奥十五町許東の山際にあり村の下を東へ越れば奥細見村へ十六町之を梅の木坂と云ふ双六原にて柿嶺まで十二町峠より三町下て奥細見の下に出つ

○矢 矯 村 (上矢矯 中矢矯 下矢矯 庄ヶ谷)

戸數四十五○庵二上矢矯一字 中矢矯一字○氏神妙見大明神(祭九月廿九日)末社山ノ神。荒神白山權現。陀大明神

○物産岩茸○双六原の奥四町許谷の兩端にあり村の奥八九町に毛無山と云ふ高山あり其麓を東へ越れば野坂河内松上河内云 二十五町難所也又村の下を東へ越れば奥細見村へ七町也毛無山の下手を西に越れば氣多郡末用谷へ三十町此坂をセンヅガ此と云末用の鬼入道村へ二十二町也鹿野へ凡と一里四町あり○陀

巖 毛無山の東腹に獨立せる巨岩あり文祿二年洪水の時此岩に舟を絆ける故に陀岩と云ひ習せりと今祭祀して陀大明神と云ふ毛無山は鷲峰山の東に並ふ氣多高草兩郡界の高山あり東は野坂の河内と當村との境にあり河内にては焼押山と云ふ

大 谷 保 (十個村)

○福 井 村 (唐川)

戸數八十○辻堂○川役世伊古役九石四斗五升五合○氏神天穗日命六王神社(祭九月廿日)○池前山龍福寺(曹洞禪本寺氣多郡母木村大龍院)○古城址 在防已尾山)○ 三津村より西へ十二町許池端にあり元岩本村の領分也村より御熊村へ山道あり長谷坂と云ふ二十二町許村の東五町許り岩本村の境湖水へ突出たる山を防已尾の城と云ふ吉岡將監持城の跡也昔は陸地を離れたる山なりし由今は西の方陸地續きになり委しくは別卷古城の部にみゆ

○岩 本 村 (田中)

戸數二十五○川役世伊古役四石九斗三升○氏神末松大明神(祭日九月二十日在大谷村)荒神○首塚(或曰黃保衣塚)○ 福井村の東南八町池端の平地にあり其間に防已尾山あり大谷村へ五町とす○首塚 村の前にあり今は篠竹生り側石地藏を安置せり天正九年秀吉公吉岡將監籠り居ける防已尾の城を攻め玉ひ

ける時數多の御人衆討死しける中に御近習の昔母衣武者十三人の首を斬て安措したる其誌なり此塚に怪異あり暗には靈火を發すと云ふ

○松原村

戸數三十○辻堂薬師○川役三石一斗四升○氏神末松大明神(祭九月廿日在大谷村)○火焰塚(號竹ノ宮)
○岩本村と長柄川を堺て東の田の中にあり村の中に湯村より來る小川通りて池に入る是湯谷川の下流也鳥取より吉岡湯村へ舟にて行けば當村へ着船す是より湯村へ八町なり○火焰塚 村の東田土の中に古松一株生たる一丘是なり松下に祠を安す竹の宮と號す此塚風雨ある夜は必ず靈火を發す故に火焰塚と云ふ何れの世如何なる故の塚なるを知らず

○六反田村

戸數十三○氏神末松大明神(在大谷村祭九月廿日)○胞衣荒神(在丸山)○古城址(在丸山)○松原の上四町許り平地にあり岩本村より五町湯村へ八町なり村東に丸山城と云へる舊墟あり吉岡將監數代相傳ふ居城の跡を將監父春齋の時當城を轉して糞上山に城けりとぞ古城の部に記す

○大谷村

戸數十○辻堂○氏神末松大明神(祭九月廿日)○林祥山祥福寺(曹洞禪本寺鹿奴讓傳寺)○六反田村の西五町許り長柄川を隔て西の山下にあり岩本村より四町上み也福谷へ八町

○大島村 (梓谷。提見)

戸數三十○氏神天三祇ノ宮(祭九月廿日)延喜式神名帳載之天日名鳥命神社是也(神主在長柄村宇田川氏)末社山王社。八幡宮。稻荷○觀音堂○辨天社。荒神二社。妙見社以上四社在提見村○古城址二在大島提見○五輪谷(在提見)○大島村の上一町許にあり此谷は洞谷の西福谷の西の谷隘にあり吉岡湯村へ五町許りの奥一町許り梓谷と云ふ支村あり又一町許奥の支村を提見と云ふ其より氣多の下も光本村へ山越し三十一町あり道祖の吷一つ打越五町福井村の谷へ下る向ひ阪一つ打越し六町御熊谷の頭に下る中坂一つ嶺迄六町嶺より光本村へ十四町此坂を岡谷越と云ふ氣多高草両郡の境にて上は洞谷坂に續き下は母木坂なり故に是を中道通りと云ふ○五輪谷 提見の奥にあり昔此所に高野山を移して數多の碑碣を建つ中古の亂世に廢地とされり今も地を穿ては五輪の碑磊々として出つ故に五輪谷と云ふと田土の石垣にも五輪の臺石多く見ゆ寺跡と云ふ所もあれども寺號も傳らず舊き事と見ゆ又是より奥數十町に石二つ重りたるあり其間に赤白黒の蛇三匹常に棲むと云傳ふ近比祠を建て辨財天と崇め祭れり○古城趾 大島村の後山にあり提見にもあり別卷に委し

○福谷村

戸數五軒○氏神荒神○七本松○大島村の東の支谷にて西側の山際にあり大島より三町半あり此谷は大島と長柄との間の谷にて天三祇の宮の後にあたる小村也長柄へ本道七町山越は四町あり提見へ五町大

谷へは下もへ八町とす村の山鼻へ七本松と云ふ古松あり圍一丈五尺餘根本より一丈許り上りて二俣に分れ又一丈許上にて上手の枝は三俣下手の枝は四俣に分る故に七本松と云ふ

○長柄村

戸數二十○氏神長柄大明神(祭九月廿九日)末社荒神。若宮。八幡。荒神○名産薑。柿。熟柿。笮器○洞谷の口西側の山際にあり福谷の山東にて坂越三町許り吉岡村へ六町也此地生薑の名産也文録年中高麗陣のとき郡主龜井武藏守殿朝鮮より薑の種を取歸り此里に植られけるありと今は昔のやうには生せず

○瀬田倉村 (上瀬田倉。景平)

戸數十四○氏神瀬田倉大明神(祭九月廿八日)末社荒神。八幡宮神。長柄村の奥五町許西山際にあり是を下瀬田倉と云ふ本村也上瀬田倉は奥にあり景平と云ふ支村あり此の村は鹿野への本道にて吉岡湯村より十二町五十間其間に瀬田倉川あり歩渡りなり妙徳寺村は此東谷にて其間十町なり

○洞谷村 (小河内。一ッ橋)

戸數二十○氏神荒神(祭九月廿八日)末社荒神二社山神。庵在小河内○破堂○古城趾二ヶ所○洞谷坂の半腹西側にあり瀬田倉より良の奥へ廿三町二十間なり此山は氣多高草兩郡の堺にて吉岡より鹿奴への本道なり洞谷より嶺まで九町也村より下は坂道緩く吉岡迄凡そ三十町次第に下るなり氣多の方は急峻にして頂より麓まで九町許也小河内と云支村あり村の上より左へ入る小谷の詰りなり洞谷河内と云ふ是なり

り洞谷と號するは日本紀にも出たる地名にて上古より紛亂なき名所なり歷世者に詳也○破れ堂 村の奥洞谷河内と鹿奴道と追分の山裾にあり今は堂宇もなし平地に古き椎の木の下に五輪四基あり昔此處に堂宇あり後代修補の施主なし故に破れ堂と云ふと云へり五輪も故ある古墳とみゆ又古城趾あり別卷に詳也

野見の保 六個村 (古記曰野見ノ四保和名抄作能美)

○徳尾村

戸數四十五○氏神大野見大明神(延喜式神名帳載之大野見宿禰命神社是也)攝社稻荷。荒神○古城○古海村と野坂川を隔て西の平地にあり其間八町川上は島村川下は徳吉雁津に隣れり此邊を野見の保と號するは昔は氏神野見宿禰の神領なるを以て也日本記を考るに此命は舊出雲國の人也垂仁天皇七年秋七月に大和國當麻邑に蹶速と云ふ強力の人あり恒に衆中に語て曰く四方に豈吾力に比するものあらんやと天皇之を聞玉ひ群臣に詔して野見宿禰をして角力せしむ宿禰蹴て蹶速の脇骨を折り之を殺しき是本朝相撲の初なり同二十八年冬十月天皇詔て殉死を止め玉ふ時に皇后日葉酢媛薨し玉ふ野見宿禰議て埴を取て人馬及び種々の物形を作り自今以後此の土物を以て人にかへて陵墓に樹て以て後世の法とささんと天皇其功を賞して土師の姓を賜ふ是菅家の祖にて野見土師は同姓なり凡そ地名は神社の名に基くもの多く又其地を領知せし人の姓氏を以て呼ぶもの之れに次く當國の内野見土師を以て呼ぶ郷村名多し此地を野美

と云ひ祭神を野見神社と號するは故ある事なるべし

○畠崎村 (或記に松上郷に入る)

戸數四十○氏神古記に牛頭天王○德尾の西十町許りにあり

○德吉村

戸數三十○氏神松上大明神○堂あり○古城址○天馬嶮○龜甲の石橋○五輪の壇○德尾より二町許り西北の田の中にあり布勢へ八町古海へ十町許り也當村昔は嵐が鼻の土手の内千代川の側にありし由今も其地を本德吉と云ふ是其舊地なり中比此里の領主德吉左近の將監彼の地に城を築きけるとき在家を今の處に移して其此新德吉と云ひけると又中古の記録に野德吉村とあり或説に昔松上の神靈の崇りに因て此郡中に栖ひ人なく草生ひ茂ける時より郡を高草と云ひ郷村の名も野の字を用ゐたるもの多し野坂野德吉の類其故ならんと按するに野德吉は野見郷の德吉と云ふ義ならむ歟是八上郡に同名あれば也氣高郡に宿村ニヶ所あり勝見の郷にあるを勝宿と云へるに同じ○天馬嶮村の北嵐が鼻の土手の中程より布勢へ六町正直に通る道の名也昔布勢城下の時東口の街道にて能作りたる道と云へり又此街道に龜の甲石橋とて名ある橋あり德吉村より二町許り布勢の方に掛れり一枚石にて少し中高く龜の甲に似たれば名づく寶曆年中岱嶽院君布勢山王社御詣の時月例御往來に因て村民石上に土を置き今は土橋の如くなれり此橋の事陰德太平記にも出たる舊跡也永祿元龜の比德吉將監布勢の屋形を負むき鳥取の武田高信と一味になりしかば布勢より人衆を出し德吉を攻けるとき此

繩手に於て數回戰爭ありしなり或時布勢の軍兵德吉勢を追ひ來り此橋を越へ深入して名ある武士數多討死せり其死骸を埋みたる所を五輪の壇と云ふ路より北の田の中の一丘也今は五輪なく只塚の名のみ殘れり

○古城 村の東千代川の邊にあり平城也城主は德吉將監なり(城の構並に變遷等古城の部に詳也今重複を避て此に省略す)

○安長村

戸數古記に七十五○氏神牛頭天王○胞衣荒神(祭八月廿八日)○天神(祭九月廿五日)○高照山東圓寺

(曹洞禪本寺鳥取天德寺)○伏野長者之墓土人今池中の宮と謂ふ是也○古城址○德吉村の北に隣て田の中にあり千代

川の西端より四町許り西とす伯耆街道にて鳥取城本より十七町二十四間と云ふ其間千代川舟渡しあり田の島村へ川越し八町湖山村へ三十町餘也此川涯の高提は龜井武藏守殿の普請の跡にて上は古海より下は秋里の三島に至れり其濫觴を尋るに此邊にて千代川を邑美高草兩郡の堺とす昔は川の兩方に水よけ無く洪水至れば兩郡の田土に流れ入て水損大方ならず其比邑美郡は池田備中守殿領内なりしが川筋所々に堰埭を製し石垣を築出されければ水脉高草の方へ入りけり是によりて武藏守殿乃ちハトをせさける程に次の出水は邑美の方へ入りければ其より互に負けす劣らず兩方此川普請に力めたりけるが後には備中守殿より橋本村の山際より大土手を築き出し田の島村の下外れ迄凡そ二里許りの間築き廻されければ龜井殿も同じく之れに對して築かれ雙方此川筋の租税は此川普請の爲に費へけるとぞ此事に就て兩家の言分多端にて矛盾のはしをなしけるが幾程なくして兩郡主國を去り玉ひて今は跡なき昔語りとなりて後の國

主の幸となる鵜蚌の争ひ漁人の利と云ふべきにや此の昔の跡を傳へ聞き古今の變轉感慨に堪へすと民談記に書けるも理りと覺ゆる○古城跡 街道の北側茶屋の後ろにあり城屋敷とて百姓の居宅となり其構の様明かに知がたし昔大喜多安長と云ふ武士の城趾と云傳ふ舊しき事にや時代知れず地名安長は其諱を呼ぶと云ふいぶかし今田土の字に念佛免と云ふあり里民口碑に當時領主の掟に正月初めて民家に於て念佛を唱する事を停止む故に村外に小屋を掛け村民其所に集り初て念佛とあへて其より各家にて唱名せしとなり其處は當村と秋里と南隈と三方の突合にあり狐が隈と云へるも其邊にあり皆其比故ありて名付しなるべし○水塘 渡し場の土手の打越道より南の田の中にタンボリ二つあり享保丁酉洪水の時千代川の水強く嵐が鼻の土手を突切らんとす若し此所破れなば安長村は一字も残らず流失すべかりしを藤綱と云ひける角力の嗚呼の者彼のタンボリ上の堤を穿ち壞て大川の水をマキ落しける時水勢地を穿ちける迹ありしが今に至て七十餘年歳々埋め出せとも其跡未だ没せず

○秋里村

戸數古記に九十七○氏神三島大明神(祭九月十四日)同荒木大明神○道場庵(本尊畫像ノ阿彌陀鳥取妙圓寺持)○紫雲山芦山寺(淨土宗本寺鳥取本願寺)○古城趾○三島の陣所○大星の橋舊跡○土産三嶋竹。胡蘿蔔。鱒。鮭○安長村の北に隣り其間六町千代川の西にあり此地胡蘿蔔を出す國中の名産とす當村は舊城跡にて地面尤も高し文祿の洪水にも別條なかりしと云ふ○古城趾 村の敷地平城にして中古秋里玄

蕃頭師永と云ふ武士の創建なり(原本古城の部に詳記しあれば)○三島の陣所 秋里の出張りかり秀吉公の麾下淺野彌兵衛陣を張て藝州の後詰を用心し加路の湊を押えたり○大星の橋跡 村の前千代川の涯に

其跡あり大星の橋と號するは此處より川向丸山の大星と云ふ所まで掛れる故也是は布勢の城下全盛の時巨濃高草兩郡通路の大橋なりしと云陰德太平記にも此橋の名出たり○三島大明神 村の下千代川の側鬱蒼たる大竹林あり土人三島の藪と云へり其内の叢社は也加露神社の縁起を考ふるに三島明神は祭神大日靈女の尊にて上古より加露に鎮座あり文武天皇御宇に神領二百十石餘寄附せられ加露秋里會津南が隈晚稻五個村の惣鎮守とす然るに天平年中吉備眞備入唐歸朝の時難風に遭て加露津に漂着ある其因縁にて後吉備公の靈を加露に祭祀せり其時三島神宮を此地に遷せる由見ゆ然らば此所に鎮座あるも凡そ千年に餘れり往古は赫々たる大社たりしにや明神より三町許り兎方に了顯山大乘院と號する三島の神宮寺ありと縁起に記せり是を以て考ふるに中古鄉村の記文に三嶋の社と記せり凡そ昔寺社を以て名とするは其寺社につきたる聚落と云へは中比迄は大社たりしや必せり濱坂村の中洲に鎮座ある辨財天の社は此三嶋の神の廟所なりと是も縁起に見ゆたり

○江津村 (古記に會津に作る)

戸數六十○氏神武王大明神(祭九月廿三日)○觀音堂○秋里村の下十五町許り大川の岸にあり晚稻村の少し東に隣れり春秋には鱒鮭を獵す夏はマキ網にて鱒をとる

南北の保

八個村(今南が隈晚稻倉見三ヶ村を増て十一個村とす)

○吉山村

戸數五軒○辻堂。地藏○氏神岩室大明神(祭九月二十五日)延喜式神名帳載之伊和神社是也○安長村の西にあり其間七町三十間と云ふ甲山村より北へ六町なり伯耆街道にて民家は道より南へさざりて孤山の麓にあり古記には吉里の保とあり或説に此村は百七八十年以前の新村あり昔吉里と云へる村ありける其迹を興して山にかたより栖をなせば吉山と云ふにやと然らば光政君の時の新村歟思ふに天正九年秀吉公鳥取攻の時南條勘兵衛吉山に出張して伯耆街道を押へたりとされば其比より吉山と云ふ名はありしと覺ゆ又里諺に往古伏野長者あるもの田を植けるとき日輪西に傾き日暮れ近つさければ長者此山に登り扇子をあげて日を招き返しける其天罰によりて長者か子孫癩病にそみて絶失せり其より山の名を癩山と呼けると訝ふかし

○足山村

戸數十四○氏神荒神祭九月廿八日(昔は五日)同岩室大明神(鎮座吉山村)○觀音堂本尊藥師觀音。古城趾(在北尾山)○吉山の西六町北尾山の麓にあり湖山村と指し向ひなりしもと吉山と一邑なり近世分れて別村となる村の後の山を北尾山と云ふ其山續き南の鼻に古城跡あり山名の執權正木大膳構あり山の名

又石塙山とも云ふ北の山鼻に古き五輪の塔あり城主の墓歟仔細知る者無し

○甲山村

戸數二十○氏神藏王權現(祭九月十九日)○足山村より西八町平地にあり鼻崎村へ一町餘布勢村に九町許也

○布勢村 (五軒屋)

戸數三十○氏神山王權現宮(祭九月廿四日)祭神二十一社神主宇田川氏○保比呂比乃五輪○惠心僧都之像同墓○紫雲山極樂寺(淨土本寺鳥取玄忠寺)○築山之觀音堂○古城趾(天神山)○正木が鼻要害○經水池六地藏。首塚○卯山○甲山村の西九町卯山の麓にあり山の後は漫々たる湖水にて風景奇勝の地也此地中古當國守護山名伊豆守時氏五世の後左衛門佐勝豐文正元年巨濃郡を轉し當所天神山に城を築て移住せられける其より豊國まで八代の間相續ありし國府なりし也其比國中の武士參勤交代して繁昌す相傳ふ當時城下の構は今の倉見村の山鼻より堀をほりて湖山村古川の池口へ通し橋を四ヶ所に掛けたり湖山村の口に掛れるを大橋と云ひ東表大手口天馬の橋を九相橋と云ふ三谷の方に鐘の手橋あり倉見の前にあるを築地橋と云ふ堀より内は皆町小路にて山王の山の後の切り平らしたる段々は侍屋敷の跡と云へり南の山鼻を正木か鼻と號するは長臣正木大膳構への跡なり西の尾には家老朝日某出張せりと谷々には九院の佛功徳院古學院勝禪院仙關林寺以下五院名傳らす豊を並へ建てり然るに天正元年國守山名豊國入道禪高府を鳥取に移し久松山に

轉せられし以來當城忽ち無主の廢丘となり惣堀も何時しか井手川を變じさしも名橋も一跨の杞となりぬ
文正より天正に至て百有餘年昔の家中屋敷及び寺町鍛冶町上 小路傾城町經水の池なんと云へる城下の
地名も今は田圃の字に變て聞く人懐古の泪を催すのみ○古城 天神山にあり右に記する如く山名勝豊の
創建なり勝豊は中務大輔熙貴の子也元祖時氏より熙貴迄四代の間巨濃郡に在城其子勝豊此地の開祖なる
を以て布勢左衛門と稱す城山の高さ十八間構へは東を面とす孤山をれども段々に切平らし後に湖水を控
へ前は渺々たる田野なれば倉見の鼻より湖山村まで堀をほりて惣曲輪の要害とす是を汐入れ川と云ふ山
頂に大井津あり今は廢井をれども昔は其深さ知るべからすと側ら盤石あり是武答天神鎮座の跡と云ふ○
山王大權現 卯山に鎮座あり勸請の時代を尋ぬるに當社の記録又里諺の徵すべきをし當國に傳る地圖の
記文を考ふるに洛東清水寺に祭る所の山王二十一社あり中比國の屋形山名氏此地に城を築かれける初之
を勸請して永く一國都府の鎮護とす則ち八王子二十一社と同神あるを以て其四邊の名稱を此地より移せり
と當山を卯山と號するは比叡山の表也叡山もと震旦の四明の洞を移す震の字易に於て東方立之東方即ち
卯なるを以て卯山と名つくと又叡山の東に金剛石あり八王子の神其上に鎮座ありて天下を守護し玉ふ此
の地天神山に巨岩あり之を表す而して此山を九相の地にたどふ九相は所謂天竺の北にある國の名也三段
に地を重ね九重に城を築て武答之天神鎮座あり因て之にならひて城を築き天神社を造る大手の橋を九相
と號するも其故也九院の佛閣戒定慧の三學もあり潮水は以て正觀海に譬へたり氣多に志加奴あり近縣に

長柄村あり是志加長等を表す戒定慧の箱を納る所を箱崎の松原と云ふ即ち湖南の松原村是也二津村は三
つの光明出つる所に比せり叡山開ける初山の乾に當て待教と云へる優婆塞來て草創す此に卯山の乾の方
に一邑あり溝口と云ふ一人の優婆塞出て穗拾ひの塔を建つ祇園の緣起にも天竺の北に有國名九相其國有
園名吉祥園内有城其内有王名武答天神姿婆竭羅龍王女爲名生八王子其眷屬八萬四千六百五十四人也此新
羅大明神と號する是也右此記文は興禪君の御時鳥取城下三里四方の地圖を命し玉ひて其所々に傳ふる
故事を註せるものあり尤も錯亂或は脱字等有て通しがたき事もあれど大率如此乃て纔に添削を加へて讀
みやすく互見の便りとす是を以て見れば天神山と號するは天竺の故事にて武答天神を祭れるなり然るに
菅靈鎮座の故と思ふは誤りなるべし又九相橋を九艘橋に作り此橋下を舟九艘並へ通ふ故の名と云ふも附
會の説と云ふべし又山王社は往古鳥取今の元魚町三丁目東側 糺屋市三郎屋敷 に鎮座あり何の比にや布勢村へ遷
座し玉ふと普く州民の口碑なり其比祭祀の時神興を休め奉りし所とて今に田中村出土の中に空地ありと
云へり此の因縁を以て魚町の商家は當社を信仰すること今に及へりと此説を考ふるに光政君の時の事な
らん歟播洲より當國に移り玉ひて鳥取城下普請の時所々に神宮あり其街心にあたる所の神社はもよりも
よりに社地を轉せられし事あれば魚町の山王も布勢と同神たる故相殿に祭りたるならん歟勝豊天神山草
創の時遷されしならば今の魚町の者の知るべきやうなし○穗拾ひの塔 昔は山王の社前の松原の道より
北の方の田の中にありしと近年社司の後園に安んず或説に延喜式神名所謂天穗日命神社と云へり按るに

其形代寶經印塔なり五輪寶經印塔の類は浮圖の説に出て神道に用ふべき謂れなし妄説なり素より右記文明なるを以て知るべし穗日の命神社は近縣福井村の氏神是也別卷神社の部に詳あり

○倉見村

戸數九〇氏神位明大明神(祭九月廿一日)○庵○布勢村より西十一町許池端の山下に在り但し山越は五六町也高住村へ二十五町湖山村へ十三町許也當村は湖山村より分れて別村となりし也

○三谷村 (東三谷。中三谷。西三谷)

戸數二十〇氏神葛王大明神○庵○梅間村の山の後ろ西の谷隘にあり倉見より東へ十五町但し山越は八町也されども匿道の難所なり此村三ヶ所に分る東谷西谷又其間の山鼻の一村を三三谷と云ふ大満村へ六町許り布勢へ十五町也正木が鼻を本道とす山路あれとも難所なり

○湖山村 (井戸。崎津。和田。濱津。産水。溝の口)

戸數二百二十五〇比古役十三石六斗七升五合(四張羅を以て落魚を漁する運上なり)○川役四石一斗○世位古役二石二斗

○藪役四斗○氏神今宮大明神祭日九月九日在崎津同八幡宮(祭八月十五日湖山祭之)末社荒神稻荷○萬松

山金龍寺(曹洞禪本寺鳥取天德寺)○水中山栖岸寺(淨土宗本寺鳥取眞教寺)○庵在和田村○觀音堂二一在濱津

○藥師堂(在濱津)○霞の里○大江定基屋敷跡○和泉式部胞衣塚○同産水の井○因幡小鍛冶景長屋敷跡○

火定塚○經塚○干猫○湖水○湖中七嶋青嶋。鳴嶋。野嶋。飯嶋。野嶋。猫物産石爐。同爐縁。石竈。松露。菱葦。蒲。

ブナ。鯉。近年有耕鯉。天明中放之。鰻。鱒。世伊古。シロ魚。小アユ。沙魚。ウグイ。ツ、ユ。アマサキ。イナコ。鰻。カラスガヒ。鼈。雁。鳧。鴛鴦。シラサギ。蒼鷺。コイサキ。水鶏。ハン。カヒツフリ。獺。

○吉山村の西十一町にあり伯耆街道にて村の東口に池後りの川あり圪あり圪の向ふ道左右に古松あり鳥取城本より一里の誌とす足山村へ七町三谷村へ 高住村へ三十町許り吉岡村へ五十町野坂村へも五

十町と云へり村の西に湖水あり湖山池と云ふ池後に兩川あり東は古る川西は新川なり新川は享保二年飢饉の時郡代役米村所川を堀て郷民の飢饉を救ひけるとぞ村の半南の端にて古る川に合て村の東外れ伯州

街道を横流れして加露村にて湊川に落合ふなり○湖水 徑り凡る五十町周回百五十町餘と云へり和漢三才圖會因幡國の條下に湖水ありと記せるは此池の事をるべし池邊の村々魚漁す鯉鮒鱒鰻鼈等多し當國昔

は鯉なかりしが興禪君の御時山州淀河の鯉魚一千尾取寄玉ひ生きたるもの四百尾餘ありけるを此池に放ち王ひけるより國中に鯉魚多くなれりと云傳ふ○霞の里 名所なり或歌書聞書に今の湖山村とあり按

するに今湖山村と云ふは溝口宇文兩村の總名也古川口に屬するを溝口と云ひ産水井ある所を宇文と云へり即ち産水と云ふの假名書あるべし兩村とも方言是れ舊霞の里なり天文年中山名氏の時故有て宇文溝

口兩村からへて湖山と改む是に於て霞の里の名かくれたるならん今宇文溝口の名も亦之を稱するもの稀なるが如玄祐子内親王歌合に和泉式部「春くれば花の都をみても猶霞の里に心をそやる」此歌増補歌枕

秋の寢覺第八卷常陸國と記せり常陸には霞浦とて聞つれ霞の里を詠しは未だ聞か此歌枕は明和年中新刻

にて新に加へたる名所多し此歌其新に選める圍しをつけたれば諸國に今霞の里といへる石所なき故霞の浦につけて常陸國と註せるならん素より和泉式部此地霞の里に出生の遺跡分明なるを以てみれば歌の言葉といひ古郷を懐へる意深切と謂つべし○大江定基屋敷、和泉式部屋敷とも言傳へたり新川の池口より西へめぐれば山鼻を嶮しく切落したる所あり小か鼻或は崩か岸なんと云ふ其山上なり昔和泉式部の親の住ける所と云ひ傳ふそれより栖岸寺の後の方へ引廻して皆其の構への内ありと云ふ○和泉式部産水井、新川の坵、池口の下、の向ふ西角の茶屋の後ろにあり昔は板屋某と云ふ者の屋敷なり古き井なり、長六尺許深、和泉式部産湯の水と呼び傳ふ式部生れし時産湯に汲みし井なりと水清潔にして早魃と雖も水涸る、事なし恒にたゞるて平地に湧る村民之れを日用とせり今此地を宇文と云ふは産水の假書あるべし按るに和泉式部當國に生れしと云ふこと古書に見ゆすと雖法美郡登儀郷谷村寶生山圓城寺本尊千手觀音の緣起にも載せ、法美郡谷村の條下に出つ又謠物、北七大夫流仕、誓願寺問語に曰く和泉式部と申すは因幡國の人なるが和歌の道に達者なるか故に召のほせ給ひ上東門院に召つかはれ給ひたると申す、以下とあれば兩書以て徴とするに足れり但し天安中大江定基因幡守たりし事國史に見ゆす按るに職原抄納言以上左遷の時諸國の權の守に任す是を貶謫と云ふ有罰減官なりとあり此貶謫の事諸國史に漏れたる少からず定基當國に任の事さある故にてもあるにや又拾芥抄に和泉式部は大江雅政の女母は越中守保衡女也和泉守道貞妻あるに依て和泉式部と云ふと然るに後水尾院御講釋飛鳥井雅章郷聞書に和泉式部は大江雅政女とあれども大江氏

に此雅政が傳見へすとあれば緣起に定基女とあるは據なるべし又日本史に定基は阿保親王五世中納言維時の孫なり圖書頭三河守從五位下長保六年入唐寛和二年六月出家す法名寂昭號圓通大師とあれは系圖にも明かなり但し定基初名雅政なるも知るべからず民談記曰和泉式部當國に生れたりと云ふこと古書にも見ゑす其謂れも聞かず丹後へは藤原保昌に具せられて下りける事あれども當國に住ける事は聞かずとあるは誤れり上の證明かなれば穿鑿足らざるなるべしされば美濃國可兒郡井尻村と云ふ里に和泉式部屋敷の跡と云へるあり式部此所に身まかりしとて墓の誌しあり、碑自然石高五尺八寸法名專意法心、以下文字漫滅但シ表の方右に年號寛仁三己未天左り方に歌あり「ひとりさへ渡ればしつひうきはしにあとなるひとはしはしとまれと」彫刻せり是辭世の歌といへり古き道中記にも此所に和泉式部屋敷ありとあれは慥かなる舊跡なり井尻村は木曾街道御嶽と細久手の間ウトフ坂西の麓也寛政七年乙卯夏余東武に赴きし時此所を通じて其地の體相を摸寫せりかゝる事もあれは書になき事とて一概に其事無しとも論しかたし小式部も當國に出生せる其舊跡もあり、事氣多郡鹿野の峰下に記す凡て諸史録に漏れたるもの他にも多からむ○同胞衣塚、古川の池口浦上山の麓にあり道より五六間山手の畑中より星霜ものふり荆棘中に埋もれ誌しも明かならずかゝる名人の古跡かくなり行くこと嘆すべし予里人に謀りて其地を買求めて其誌しを建つ唯是懐古の情を表せしのみ其記並に銘に曰「是和泉式部生時埋其胞衣之處也式部者大江定基女爲和泉守橋道貞妻以故稱和泉式部因幡州高草郡湖山有大江氏遺跡相傳式部生于此、後一條帝時以善和歌、召侍上東門院稱、辨内侍胞衣

塚旁可二百步有産水井湖山濱湖本名霞里郷産水名興遂爲地名邨曰宇文字方言産水也天文中州牧山名氏有
觀賞於宇文溝口之事乃使二村專湖中之利遂合二村改名湖山銘曰日月逝矣千歲誰儔春霞一曲遺響不休天明
七年丁未五月朔日藩侍醫恭庵安倍惟親識○因幡小鍛冶屋敷 新川池口の上の山上にあり右に云ふ和泉式
部屋敷の境内なり此鍛冶同銘三代あり景長と稱す系圖は粟田口につれり當州の中四ヶ所に屋敷の跡あり
初代は法美郡宇倍山に其跡あり當村に住ひけるは二代目と云ふ三代目は同郡味野郷竹生村にあり是を
生小鍛冶と云ふ又八東郡小治田谷にも其處を鍛冶屋村と云へりこゝにて打物せしを寺垣打と云ふ是四代
の幸長と云ふ是歟但し弟子なるにや當村に住みし時代明かならず其比小鍛冶が詠草とて一首の狂歌土人
目口碑に残れり「浦島か玉手箱にはあらねどもわけてくやしき鍛冶か節會酒」となん聞へし是は景長殊
の外なる酒好にて初春の設けにとてよき酒を貯へ置けるか春をもまたでなくなりしかば斯くは詠けると
云傳ふ○干猫 當村の民家に所持せり是は昔伏野長者の娘籠愛しける猫なりしか彼娘不慮に死しけるに
猫も亦幾程もなく行衛知れずなりぬ其後湖中にて今云ふ猫島のほとりに沈み死居けるを取上けるが年經
て乾固まりけるとぞ以前此國にて何の沙汰もあかりけるが延享の比備前の國岡山の家中より當村干猫の
事を尋來りしかば其より國中なへて其風説流布しけるなり今は猫薬師と崇め鼠のあれる時は此猫薬師の
神符を所持すれば鼠騒かすと云て諸人其符を乞ひ受けり湖中今猫島と云ふ名の島あればさる事もあり
しならむ歟其時代を考ふるに長者は娘の菩提の爲とて帝釋の像を造りて摩尼山奥に安置せり其後仁明帝

の承和年中比叡山第三の座主慈覺大師摩尼寺を開基し玉ふこと由縁記に見ゆ承和より於今凡九百年也彼
の娘死しけるは其先とあれば星霜いと舊く其死骸の存在せるも不審しき事ともなり或説に此猫は寒中に
死して死體自つから干固まれるを長者の事に附會して云ひ傳へし也とも云ふされと當國に知る人あかり
しを備前の人の聞傳ふるも不審也想ふに光政君此國に御座しし時より其説ありしものによ○經塚 伯耆
街道村より西へ十町餘り沙漠の中にあり道の左右に古松生たる兩丘是也是は伏野長者供養せし經塚と云
傳ふ人之を一里塚と云ふは間違なり里塚は前に記する通り東の口土橋の涯にあれば也

○三津村

戸數古記に三十○池の川役二石九斗三升○氏神荒神○古城址(在三津が崎)○手引の松舊跡○瑪瑙石
(在龍が崎)○福井村より北へ十四町池の西端の山際にあり伏野村より十三町南の後ろにあれり湖山
よりは西へ五十町とす此村も池獵す村より東の山鼻を龍が崎と云ふ直下九重の淵に臨む鯉鮒の屬多く此
所に集る冬は猶多し又此崎に瑪瑙石あり山上より出つるは石薄くして玉となすべきもの稀也水底によき
石あれども底深くして容易に得がたし土人寶石たるを知らず燧石となし此石より出したる火は火難無し
とて散々に取盡して今はよき石稀あり○古城 村の南湖水に突出したる山鼻を三津が崎と云ふ其處に秀
吉公本陣の跡あり天正九年吉岡將監籠り居ける防己尾の城を攻玉ふ時の向ひ城の跡也其時公小松を一株
植玉ひけるが程を成木せり之れを秀吉手引の松と呼ひけり然るに無知の柚人伐捨てける由民談記に見

也此類所々にあり可惜今其跡も定かならず

○南限村

戸數二十三○氏神岩崎大明神(祭九月二十日)○加露村の南八町許り田の中にあり江津村より十五町也安長より加露迄の街道に當る村外れに古松二本あり昔池田備中守殿扈從二人討果しける其跡の誌しと云ふ其邊田の字に十九二十内新田卒都婆を書九幽靈出など云へるあり十九二十とは其二人の年なりと云ふ

○晚稻村

戸數十九○氏神伯王大明神(祭九月廿日)藥師堂○加露街道をはなれて東北の田の中にあり南か隈より北へ本道七町畔道は四町許り也東は江津村西は加露村あり行程各八町といふ南限晚稻此兩村は本加露村の内なりし由今別れて皆本村とある○藥師堂 村の南外れに在り昔此處に寺ありて其寺の本尊を安置せるなりと座像木佛自連座至後光一尺四五寸 舊き事にや寺號も傳はず其境内を堂屋鋪と云へり昔は繁昌の寺なりしや墓はらあり五倫碑磊々として多し或時大刀鏡其外種々の物を掘出す

○加露村

古記云灘戸數百九十地方戸數百四十四今云四百二十三(本網師屋十二廻舟三十二艘)○久七云洋二百四十軒地方ともに凡八百軒許り○氏神神明宮(上分祭之)同加露大明神(下分祭之)三代實錄載之加露神社是也社領十九石七斗二升攝社水戸大明神。惠比須。天滿宮。別社志村八幡宮○西攝山東福寺(淨土宗本寺京都知恩院)寺領

二石八斗七升六合○弘縁山西念寺(眞宗本寺京西本願寺)○藥師堂○御制札場○御番所(徒士一人下番水主二人)

○御茶屋○取上島(今禽が島と云)

○經島。不審島。衣裳塚○産物鯛鰯鮒小蛤鱈鮫水母和布湊走りの鮭鱒魚鱈ウ

グイ。セイゴ沙魚蜆○ 晚稻村より七町西海濱沙漠にあり加露の津といふ鳥取城本より一里三十四間と

す當村漁農兩村に分る漁師は湊の方に居り農家は湊川の傍に町並をなせり村の入口に湖山川あり東に流

れて湊川と一つにゐる湊川は知頭八上八東邑美法美高草諸郡の流下此處に落合て海に入る國中の大河な

りされど西北をうけたる荒磯にて河口の廣狹定かからず故に大船入ること稀あり河東の灘手を東濱と云

ふ當村旁爾とす是より巨濃郡湯山海士細川へ濱續き也村より南限へ八町江津へ十二町秋里へ二十六町安

長津頭へ二十八町古市へ川越し一里半湊より海上酒の津へ二里半青屋へ 但州居組へ五里諸寄へ六里

作州津山へ十八里○加露神社 當村湊口沙漠の山上にあり三代實錄載之官社也延喜式神名帳漏れたる故

式外の神社と云へり祭神吉備大臣と縁起に見ゆ其略を考ふるに天平年中吉備公遣唐使歸朝の時難風に遭

て加露の津に漂着ある當時此地には三島大明神鎮座ありしか吉備公漂着の後三嶋の神祠を今の三島の地

に遷し此地には吉備公の靈社を建て鎮守とする由也尤も無稽の怪談多しと雖も大畧此の如し年號は元德

元年作者は秋里原蕃の頭師永と記せり是は後醍醐天皇の年號至今凡そ五百年に垂とす但し古記とは見ふ

かたし疑らくは書寫せるものならん按續日本紀吉備公入唐は兩度なり其初靈龜二年多治比縣守を遣唐使

とす藤原宇合副使たり吉備公此時は下道眞備と云て年二十三阿倍の仲磨十六歳二人ともに學問の爲に縣

とす藤原宇合副使たり吉備公此時は下道眞備と云て年二十三阿倍の仲磨十六歳二人ともに學問の爲に縣

守に從て入唐せり其後二十年天平七年三月多治比廣成唐より歸る下道眞備も此時歸朝せり縁起の所謂天平中歸朝は此時の事なるべし異稱日本傳に上古入唐は越前の國より渡海せりとなれば當州の浦々は往來の海路なればさる事もありしにや三代實錄に貞觀五年十一月新羅國の人五十七人因幡國荒坂の濱頭に來着の事見ゆ荒坂は巨濃郡湯山村の近邊高江矢谷等の古名也歷世者に詳武天皇天平五年三月十八日吉備公歸朝於此地見異神乃素盞烏尊也還到京師奏旨奉勅同六年令營社其後圓融院天祿三年自西峰遷于廣峰其後又貞觀十一年遷山城國京祇園之社是也一は是を以て考ふるに加露の社記年號も合へり又國の方位も因幡より播磨路を経て京へ歸られしならん歟廣峰の攝社白幣社は吉備公の靈社とあれば加露の社も其靈神と云ふ説據なきにあらず縁起の全文を見るに吉備公漂着ありて其まゝ加露に永住ありし様に書きたるは鹵莽と云ふへし又遣唐使と云ふも間違あり吉備公遣唐使は其後天平勝寶二年也同六年正月歸朝す天平神護二年大納言に任す同年十月右大臣とす寶龜二年三月右大臣致仕す同六年薨す年八十二國史の所載此の如し此人再ひ入唐して博學の譽あるに因て微賤より登用せられて大臣に至れり世に吉備大臣と稱する是也又三代實錄云貞觀三年十月因幡國正六位上加露神授從五位下と見ゆ按するに吉備公薨去より此に至て八十七年なり正六位上は又此より先なるべければ此位階疑ふくは三島の神からん歟神階神社部に詳なり○登利が島 湊の沖にあり灘より四町十八間と云ふされども荒磯定かならず島東西四十間南北六十間又其南北に岩二つあり皆登利が島なり今禽が嶋と書けり加露の社記に吉備公

漂着の時此嶋に取上り給へりとあり今登利が嶋と云へるは取上りの略言なるべし又此嶋に少時座して嶋上の鳥をながめ給へりと云ふ文もあれば禽か島の文字も亦謂れあるに似たり此外不審嶋經嶋等其時よりの名と聞ゆ○衣装塚 神社の邊にありと縁起にあり是は吉備公裝束ぬぎ捨て納め玉へる誌しの塚と云へり今知る人なし

末恒の保 (五個村)

○伏野村 (中ノ茶屋)

戸數九十○氏神妙見大明神○毘娑門堂。地藏堂○宮嶋。長者屋舖。椗塚。古城址○土產香附子サン俵海苔。和布。貽貝。鰻。石灰。内海村の東伯耆街道より南へ入る谷の口にあり湖山村より西へ一里五町十間其間に中ノ茶屋として當村より出たる民屋三四軒あり其西に里堡あり湖山村より一里の誌しなり古記には伏野ノ保としるせり又此地を伏野と名つくるは神代の昔し大己貴神御通過の時白兔の伏し居る處なるを以てなりと故事宇津見村の條下に詳かなり○長者屋敷 湖山と中の茶屋との間にあり海道の南の側沙漠の中に屋根石の如くなる小石數多ある處是なりと云ふ長者の名を産見と云ひけると其富七珍萬寶一も闕くる所なく何にても心に叶はずと云ふことなかりき今の湖山池は昔時は池にあらずして長者所有の田地なりしが或年田を植ゆとて國中の人夫を催し一日の中に全く植んとせしが少し残りけるを長者

本意なく思ひて金の團扇を以て夕陽に向ひて三度招きけるに不思議や山の端に入らんとせし日影三段許り昇りければ遂に田を植ゑしまひけり扱翌年田を植けるときも復是の如くなりしと斯様に天日を招きかへす程の福力に慢し心の奢り日に長し遂に天罰を蒙り田地の忽ちにして湖水と變し財寶も亦消失せ迹方もなく絶へけるとの里諺なり近邊は椋塚と云ふ小丘あり此長者全盛の時スクモを捨ける跡なりと云傳ふ角寺村摩尼寺細川村の清泰寺も此長者の建立せる由彼寺の縁起にあり今安長村の田の中に池中の宮と云ふ祠あり長者の墓の誌しなりと云ふ昔は松林なりし由今は竹林となれり當時池水丘の四邊をめぐりける故池中の宮と云ふにや

○内海村 (奥内海。杖衝。神主土居。樋の口。濱屋。河原内海爲本村)

戸數六十○氏神白兔大明神社領二十石○攝社 ○觀音堂○不増不減之池 在神社境內 ○氣多か崎○於岐の

島○高尾山○戀島○宇津見か鼻 戀坂。石分坂。鐘か崎。土産鹽濱あり ○伏野村の西宇津見か鼻を堺て海濱

にあり但し民家は御熊谷の口に屬て伯耆街道より山手へすざりたり地理志に自伏野濱路十一町三十間其中坦道一町十四間廣一間海風起則怒濤沒道故行人登山而往此道二町四十七間廣一間とあるは此宇津見が鼻を云るなり今は沙漠堆積して岨道もなく濱路往來自由なり但し宇津見が鼻の絶涯高く行人仰之石所々にぬけ出墜かゝりたる様あやうし此上の道を古惠牟太坂又戀坂或は石分坂とも云ふ昔は此嶺を氣多高草兩郡の界とせり古き郷村の記録にも内海は氣多の郡内にありて末恒の保に屬せり舊事記にも所謂白兔の

神跡及び氣多か崎於岐の島等今に傳へて當村傍爾にあれば上世より氣多の郡内からんに何の世其の界紛亂しけるにや想ふに舊きことにもあらず土人口碑に此石分坂と云ふは龜井殿鹿奴に座はしけるとき此坂中に石を置て兩郡界の誌しとせられしより石分の名生すと云へは其頃までは氣多郡なること明なりされば御國換前後高草傍爾となりしなるべし又此村以前は此地にあらず是より奥にて今の奥内海と云ふ處其舊跡と云へり昔は此谷の口岩石峙ち圍りて御熊谷の流水を湛へて湖水なりしを龜井殿の時岩石を切落し澗水一時に流れ落ちて其跡皆新田となれり其時谷奥より沙石を推流して濱手は忽ち石河原となる今云ふ河原土居是なりされともうしれ満つれば海水内に入て田土に注ぎける故湊の口に大樋戸を造て是を防さけり今木戸土居と云ふ是あり然るに或時海風大に吹起て一夜の中に沙漠をなして昔の跡をくかりぬ其時奥内海に觀音堂ありしが堂も佛像も沙に埋て今に至て其跡知れすと云ふ其より奥内海の民家を濱手にくり出し新一村をなせり是今の濱宇津見にて是を本村とす昔の本村奥宇津見は今民家僅に残りて三四軒あり是より西の方杖衝坂の麓に支村あり坂の口に出茶屋あり皆内海村の内なり此坂を杖衝と云ふは行人杖無くては險かたき難所なるか故なり○古惠牟太坂 前に記す宇津見か鼻の事なり此坂の名數々あり戀坂鐘か崎等也昔大己貴神八上姫を婚んと欲して出雲國より此國に來り玉ふ時此坂を險へて初めて白兔に遭玉ふ故事に因て古惠太坂なりと云ふ或は戀坂の轉語とも云へり又鐘か崎は近き世此海中より鐘を取上げける故の名と云へり其鐘今鳥取本願寺に納むる所の名鐘なり其比此寺近縣湖山村傍爾にありしかり其

寺跡を今も蓮池と云ふ是也宮部善祥坊鳥取在城の時の事也歴世考に詳也○白兔大明神 村より西へ一町其より南の谷間三四町入て松林の中に鎮座ある是也當國の内神社の名跡數多なりと雖此神の故事は舊古二紀の載する所其神源最明けく國中最初の祭神なり崇敬すべし神社の後山を高尾と云ひ或は氣多か崎於岐の島等神書に出てれる名跡今に傳へて當村海邊にあり委しく歴世考に記して此に畧す土人口碑に中比の亂世にや神光衰へ滅し神祠も跡形なく里諺も絶失ぬる事年久し然るに龜井殿當郡主の時或夜の夢に何ともなきもの來りて我は白兔と云ふものなり我か住む社なし本所に社を建て賜へとの示現なり武藏守殿不思議の事なりとて明日詮議ありしかども其事絶て知るものなかりければ其儘に打過し玉ひけるごきに又先夜の如く靈夢を感じ玉ひければ今はとて在々所々尋求められけるに九十歳許りの老翁其事を聞傳へたりとて其の社こそ昔時此の處に在し由なりと申出ける然らばとて今の地に再興有て神殿を營み社領をも附け玉ひけるとそ爾後光政君より御當家今に至て相替らず神田御寄附し玉ひけるなり扱此神號様々に云へり今此にては大兔大明神と呼へり或説に塵添蓋囊抄を引て老兔とあるを文字を變てかく云ふにやと云へり按するに土人今大兔と稱するは白兔の訓の訛謬ならん神書に白兔神と假名付あるあり白の字青とよみかゑるは和訓の故實と云へり例せば年中行事白馬の節曾とあるに準して知るべしとる白兔の事舊古二紀の載する所怪談に似たれども蟠龍子が神書の説に豊玉姫を龍と云ふは人を八咫鳥無名雉など云へるに比して見るべしとあれは素兔と云ひ和邇と云ふも亦準して知るべし神代今に至て幾千載其故事相傳へて泯せず崇むべし○不増不減の池 白兔社の下道の側にあり方二三丈の水塘也旱魃にも水減せず霖雨にも増すことなし播州曾根の天神の境内にも同じ名の池あり土地沙漠の故なるにや○氣多か崎 杖衝坂の海に突出たる山鼻を正木か端と云ふ氣多か崎是也と又の名神向神下とも云ふ其沖の方に屏風を引たるか如く四角に直立する島を於岐の島と云高尾は神社の後山也以上は舊事紀に載する所の名所なり又戀島と云へるあり於岐島と氣多か崎との間に常は水面と等しく平たき小島也干瀉にあらざれば明かに見かたし大己貴神此島に上りて八上姫を慕ひ玉ふ迹と云傳ふ今コウ島と云ふは戀島の轉語也と神下神向も皆大社の神の通り玉ひし故事に據れる名稱と云ふ或説に氣多か崎は酒の津の海邊ならんと云ひ又母木中の阪の大崎の事あらんと云へり此皆推量の臆説遙けき神代の名迹今何を證しとして其是非を定むべき舊事紀の所謂白兔の於岐島より和邇の背を踏て氣多か崎へ歸るとあるは土人口碑其文に合へれば此れにや從ふべき歟扱又於岐の島前後の海底に奇石數多あり長五六尺或は七八尺大さ二尺圍り三尺大小石の柱なり其形四角六角或は八角宛も材本を削りたるやうあるか豎さま横さまに組立たる如く杖衝坂の鼻より沖へ七八町許りあり土俗に昔御熊の神此處より隱岐國まで石の橋を架けんとして一夜に造り玉はんとせしにアマンジャク鶏の聲をつくり眞似て遂に事ならず其跡なりと云ひ傳ふ奇異の事也安しく御熊村條下に見ゆ

○中 村

戸數二十〇辻堂○氏神御熊の神社○荒神○ 内海より南の谷奥十二町にあり中村と云ふ村處々にあり

故に此を宇津見中村と云ふ

○御熊村

戸數十八○辻堂○氏神御熊神社(延喜式神名帳所謂阿太賀都健御熊命神社是也)土俗謂柱ノ大明神攝社
 鍛冶殿禿倉○土産平地木○中村の奥十三町小坂の上にあり此地を御熊村と云ふは氏神の名を以て呼ぶ
 也土人和訓の近きを訛りてミクラと云ふ是に於て後人文字を三倉に作るは謬りあり村の東の山を踰れば
 大畑村へ十七町吉岡湯村へ二十二町也北へ越れば福井村へ廿町是を長谷坂と云ふ西へ越れば氣多の奥澤
 見村へ廿町其間坂道十五町是を佛峠と云ふ氣多高草塚の山にて難所なり南西に越るを岡谷越と云ふ氣多
 の下光本村へ廿町又此時を郡界とす相傳昔日本に平地木(ヒラタ)なし當村御熊山に初て生す其より諸國
 に弘ると云へり今は乏し○御熊の神社 村より神樂堂へ一町其より石階あり凡ろ八十段皆材木の如き自
 然石にて險阻に積み上たれば容易くは登り難し其上より平地あつて神廟を安す延喜式神名帳所載阿太賀都
 健御熊命の神社是也其側に奇石あり細く長く大さ屋宇の柱梁の劉成せるか如く積て山岳をみせり土俗柱
 大明神と云ふ相傳ふ此神石橋を作り隱岐國へ架渡さんとて一夜に造り立てんとし俄又夜明けて事成らす
 捨置玉ふ跡と云傳ふ葛城の一言主神の故事に髭鬚たり凡此山の尾續き彼の隱岐國へ橋掛玉はんと杖衝坂
 の鼻まで五十町許の間土中皆此の石の柱なりと云へり天工絶異の境地と云ふべし此神の故事日本紀神代
 卷に見へ又三代實錄貞觀七年六月八日因幡國無位阿太賀都健御熊の神に從五位下を授け玉ふ事見ゆ

因伯 叢書 因幡誌第九郡郷之部(上)

氣多郡

○當郡は高草郡の西に並ひて伯耆國の東に隣をみせり南に鷲峰山あり其西の谷を河内と云ふ土俗鹿奴河
 内と稱する是也其地鷲峰山の後南に廻りて八上郡良田郷に堺す詰りは知頭郡佐治の郷と伯耆國河村郡と
 突合ひたる其限りを河内山と云ふ鷲峰より東は末用谷にて木入道を詰りとす是高草の境にて野坂の河内
 より下は矢矯の無毛山洞谷の峰通り母木の中坂を限とす西の方伯耆の堺は河内に佐谷峠滑石坂の嶮あり
 次に勝部郷桑原村に川上越の坂あり次に絹見保長和瀬村に西坂あり北は一面に海あり而して滑石坂の山
 脊南より北へなたれて海に斗出す其亘り三里餘なり是を長尾山と號す氣多の中位に在て是より東西方位
 を分て大坂勝見坂本の方を山東と云日置勝部絹見の方を山西と云ふは長尾山を標準とする當郡の土俗を
 り郡の大き高草郡に次く其地形大凡方にして南は狹まり北は廣し海濱の東西母木より長和瀬に至て三里
 餘南北は河内より姉が泊りの海岸迄三里半に餘れり神書に大己貴命稻羽の八上姫を婚らんと欲して氣多
 の崎に到り玉ふとあれは氣多の郡と號するは舊き名と見えたり(和名抄氣多郡の下に曰く大原。坂本。
 口沼。勝見。大坂。日置。勝部。以上民談記曰大原今此名所なし鹿野の奥に上原下原原井手など云ふ處あ
 り此邊の事あるべし口沼今此名の所なし勝見湯村より濱の方に近代まで大なる澤沼あり何時の程にか切

埋め今は田土にあり澤の處僅に残れり此邊にありし村歟又今の日光の地にてもあるか此所昔は大なる澤にて書の次第は此所にあたりと以上今按するに和名抄一國の下に郡の名を註し郡の下に註するは郷れ名なり本朝古制國を以て郡を統へ郡を以て郷を統る是なり當郡の下に所謂大原口沼今其處知れずと雖も其餘分存在する地名あり坂本勝見大坂日置勝部等なり此地名を以て和名抄載する所と合せ考ふるに郡の東の端より西の方へ一谷くの名を順にかそへて書たるなり其初に大原次に坂本とあり坂本は母木より南へ入る谷の惣名なれば大原は其の東の地なるべし坂本の東は小澤見内海の邊なり此地今は高草郡に屬して末恒保と號す中古まで氣多の郡内なりし事古き記録に見へれば此所大原の古地ならん歟又坂本の次に口沼次に勝見とあれば口沼は坂本谷と勝見谷との中間に在るべし然らば日光谷の事なるべし民談記にも兩説を擧て地形は勝見湯村の邊かと云ひ書の次第は日光の地に當れりと註せり其他求むるに所をし又民談記大原は鹿奴の奥に上原下原原井手など云ふ處あり此邊の事なるべしと云ふ訝かし鹿奴の奥に其云ふ所なし上原は山宮村に相並で鹿奴の西にあり下原は濱手へ下りて八幡村に隣れり兩村共に大坂谷に在て鹿野とは谷ちかひあり殊に上原と原井手とを別村のやうに書たるも誤なり上原原井手は一村の名にて本名原井手の上村なりそれを畧して上原と云ふと石に云ふ和名抄の地名は一谷くの名を言たるなれば大原は大原郷なり大坂も同じく大原谷の惣名にて大原とは別地なり然れり其處に原の字の付たる村落ありとて是を大原の舊跡とは察し難し○或問内海小澤見の邊今其土地を見るに南は山重り北は海なり

大原と稱すべき廣野にもあらず如何答て曰く往事計るべからず懷橘談大原野の條下に曰大原とは田一十町許りの平原なり故に大原と云ふ古は田十町許りを大なりとす今郷里の戸口を見るに人民の蕃息尤も大なり然れば今土地の廣狹を以ては論し難し又問ふ今日光谷を口沼の古地とさすときは和名抄古本日江を口沼と寫し誤り後世クチャマの假名付したるも知るべからず口沼あれば奥沼もあるべきことあるに其名のなきは訝かし答曰非也凡る郷村里の名は奥口上下の差別を稱するは古の制法とも考へかたし今日置郷勝部郷各奥中下を分つて三郷とし勝見を勝宿の郷と改め上下二郷に分てり其類國中每郡少かす是等を以て明察すへし相傳ふ日光の地往古は裏海にて難波の磯或は左幾與利湊と稱しけると是を想ふに口沼の奥口の口を稱するにはあらずるべし只其湊口の名にして此谷の惣名ならん歟奥の方を奥沼と云ひ口の方を口沼と云ふとも和名抄の載する所は一名一郷なり古今傳字の誤り諸書少からずと雖も口沼日江の一説は蛇足を添たりと謂つべし○民談記曰當國に昔より云傳ふる郷保庄の記一通あり是は八上郡弓河内村六郎左衛門と云ふ者所持なり此内今絶たる處或は今の制法と違ひたる處々是を尋ね記し奥に書付るなり氣多郡(十八)坂本郷。大坂郷。大原郷。光元保。宮吉村。大澤見。恒松保。富吉村。末用村(保と)恒末村。宇津見。勝見郷。日置郷。姫路村。鹿野郷。勝部郷。鷲峰社。青屋村。(恒末 今此名の所なし今氣多高草の境伏野内海澤見のあたりを末恒保と云ふ此所ならん歟氣多高草の界今多く混亂す昔は此邊氣多郡の内と見へたり○宇津見 今内海と書く今は高草の内なり○青屋村 明德記には青屋の庄と見へ

たり以上 又按るに此記録今は鳥取治工坊の町人米屋治三郎と云ふ者の家にあり弓河内六郎左衛門近年没落しけるに因て其一族たれば所持すと云へり右村名の内宮吉と云ふ所今はなし土人口碑に母木酒津邊の惣名を宮石と云ふは是は氏神板井神社は方六尺餘の大石を以て形代とす故に宮石の神と云ひ土地の字も其縁と云へり此説に據て見るときは宮吉と書きまは宮石を誤まりしもの歟然らば母木の古名あらん又天正年中吉川元春勝宿明神へ青銅寄付の證文あり今度宮吉の城嶺に落去と書けり其外陰徳太平記等宮吉の城の事出たれば宮吉と書來れるも亦久し想ふに後人石と吉と和訓相近きを以て板井の神體と附會して云ふも知るべからず二義決し難しと云へとも凡そ地名は神社の名に基くもの多ければ姑らく土人の説に従ふべし○又曰く寛文中改記せしめられし郷村の名左の如し氣多郡(八十箇村)勝部下郷(三個村)青屋今は向 青屋今下 井手村。勝部中郷(四個村)若川村。龜尻村。山田村。北河原村勝部奥郷(七個村)鳴瀧村。八葉寺村。田原谷村。紙谷村。楠根村。澄水村。桑原村日置下郷(四個村)上青屋村。露谷村。太平田村。小平田村日置中郷(四個村)山崎村。養郷村。奥谷村。大坪村。日置奥郷(五個村)藏内村。早牛村。山根村。河原村。小畑村。絹見保(二個村)長和瀬村。絹見村。母木保(五個村)酒津村。母木村。奥澤見村。富吉村。常松村。下光本庄(六個村)下光本村。戸島村。馬場村。塚手村。西分村。廣木村。鹿野庄(四個村)閉野村。末持村。水谷村。鹿野坂本郷(五個村)宿村。片山村。重高村。二本松村。下坂本村。宿下郷(九個村)濱村。小谷村。芳所村。湯村。福田村。掘掛村。

重山村。岡井村。木梨村。勝宿上郷(五個村)中園村。妙見村。寺内村。今市村。玉川村。殿村郷(七個村)河内村。鷲降村。小別所村。下石村。飯里村。原井手の上村。八幡郷(十個村)山の宮村。橋詰村。新宮村。高下村。高江村。會木村。下原村。八幡村。姫路村。日光村。以上按るに古記録の内母木の保五個村の内母木村を新古二個村に分て六個村とし鹿野庄四個村の内水谷を鹿野の内に屬して新たに小畑村の名あり坂本の郷五個村の内片山を土居村とし八幡郷十個村の内姉ヶ泊村を増て十一ヶ村とす又勝宿下郷九ヶ村の内芳所と書たる村名今はなし但し澤田村をへて九ヶ村とす以上八十二ヶ村也且つ芳所村何と訓たる村名にや芳の字は字彙字典等に見えず訝ふかし仔細に澤田村の下に見ゆたり

母 木 保 (五個村) 今増新町爲六個村

○母木新町驛

戸數四十○氏神板屋大明神(在大澤見村)○御制札場役馬十五疋○一求橋○ 母木坂の西の海濱にあり伯耆街道の馬驛にて高草郡小澤見より二十七町餘とす但し郡境中坂の峠より二十一町也其間に母木坂あり坂長さ十九町五十間 伏野中茶屋の里堡より此坂に至る四十町 母木は新古兩村あり昔は此街道に民家なく母木村は街道の南にあり此地は寶永二年初て馬驛廿五座を定めらる其比鹿奴の町衰頽せしかは鹿奴新町の土人彼地を轉して此地に移り舊名を呼て新町村と云ふ其より母木を古町と云へり其後年々戸數増し

今は新古家續きとなりぬ此驛より西の濱路に鹿野川の下流あり此所にて母木川と云ふ板橋あり長三十間
横七尺是を一求橋と號す古記に曰く母木川渡り上かりより二つ石まで七町四十二間川後より西の二つ石まで百九十間町屋裏濱の廣さ百八十間海端より坂本の堺に距て五町十五間といへり○一求橋 母木川に掛れる橋也昔此川に橋なく行人徒涉りす地理誌に母木川廣十五間深一尺五寸可徒涉大水無渡人一日とある是也砂川なれば川の廣狹水の淺深も定かならずややもすれば行人難儀に及ひけるに天文年中に一求と云ふ道信者發願の功力を以て初て此橋を造れり故に其名を以て橋名を呼ぶ也一求は伯州松崎の俗名源六と云ふ毎に酒津の浦に來て魚を荷て渡世をなせり其往來朝暮此川を渉るに諸人の勞苦をなげき村民に相議して橋を掛けんとせしかども成らず源六己むことを得ず遂に法心を起して倉吉の大蓮寺と云ふ寺に入て圓頂黒衣の道心者となり名を一求と改め諸方を勸化し奉行所へ訴へ免許を蒙り此川と濱村の勝見川と二ヶ所に橋を作りけり猶も後代不易となさんとて因伯の所々を勸化し元米二十石を取集めて役所へ納め此利米を以て永代二ヶ所の橋の修補料とあし下さるゝ様に愁訴に因て今に母木村より年々の破損を修造せり殊勝の道心者と謂つべし一求後に此里外れ一町半許りに章庵を結ひ住して一生托鉢の外世の交りなく寛延三年三月十五日に身まかりけるとなり庵室は残りてありしが寶曆二年八月十日の洪水に流れ其跡今は川原となりぬ

○母木村

戸數三十○民神板屋大明神(在奥澤見村)○雲谷山天龍院(曹洞禪本寺備中國舟木山洞松寺)寺領四石五斗四升○古城二大崎城號湊
古河城號山○新町の南に續けり是母木の古地なり里諺に曰母木は舊梅村なり往古此所に樹の大樹あり竟に呼て里名とす中比此地の人風俗悪しく科人止む時なかりしかは時人樹と科と和訓同じければとて樹の字をかき分て母木となしけると其樹の古木近き世まで天龍院山下田圃の中に在りし由徑り七八尺形状岩石の如くなりしが年々こほち今は其所明かならず○大崎城 母木坂街道の上にある氣多高草界の山にて城は奥澤見村の旁爾なり樋土佐右衛門と云ひし武士在城せりと或土佐守と云ふ説あり舊き國侍にて代々山名の幕下たりし由天正の初め人並に藝州毛利の指揮に従ひ無比の忠貞を盡せしとかや秀吉公當國手遣の時毛利方の城々大半離反せしかとも樋は義を守て移らず鳥取城攻の時も富城に籠り落城の後まで持詰たり秀吉鳥取を平定し玉ひ伯州の南條小嶋を救はんと大軍を率ひて此所を廻り玉ふに土佐右衛門城上より是を見下し弓銃を聯ね須破と言はゝ討んと鳴りを靜めて控へたり秀吉の人衆之を見て是程の小城踏つぶして通らんとひしめきけるを秀吉公之れを止め彼は義士なり構ふべからずやがて自滅せんと仰せありて其儘にて通り玉へりと土佐右衛門後宮部善祥坊を頼て詫言を申上ければ公其の義心を感じ玉ひて恩免ありて領知千石を賜り宮部が與力として其儘富城に差直玉ひけり然るに關原一亂の時宮部兵部少輔に従ひ關東の御味方に參りしが兵部少輔忽ち戀心し事露顯に因て囚人となる其時樋は三河國より出奔し竊に舊里に歸り妻子を引具し下味野に隠れて生を耕稼の業に終れり其時樋を懸樋の二

んと其外嶋々名稱奇岩等書しるすに暇あらず神書大己貴命の故事に所謂氣多か崎とは此邊の事なりと云傳へたり此浦船懸り宜しからず東西北風には船一艘も泊しかたし南風のみ安しと云ふ海上加露の津へ二里半葦崎の湊へ三里あり○龜の宮 神體青白の玉石也其形圓く圍み二尺七寸三分重さ三十六斤と云ふ此宮は別封攝津守 君の創建なり享保元年勝見御入湯の時御姫君御同道なされ四月廿一日此浦御遊覽ありて漁人に網をれるさせ玉ふ時一つの龜網中よかゝり來れり大さ甲の徑り三尺六寸横二尺八寸高一尺二寸其體相尋常ならず是神龜ならん精靈を齋て國土豊饒守護神らしめんとて龜をはやがて海中に放ちやり此所に小社を建られ龜の宮と崇め玉ひしと云其遷宮五月六日とかや神體を何にかせんと評議まらゝなる折節此浦人出雲國日の御崎の神前の海中より釣針に掛りしとて一の奇石を歸りける間かゝる時節にこそ此石の釣の絲にかゝり來りしも不思議なれ是神龜の感應あらんとて即ち其石を形代となし玉ひける今の神體是ありと云傳へたり○中將嶋 湊山の磯にあり此嶋の名寛文延寶の比此邊に一人の道心者ありて中將と稱す氣多高草の間を托鉢して日を送れり常に酒を好み酔て山野に起臥し定まれる栖もなく乞食の境界なれども天資無欲にして道心堅固なりしか貞享元年三月十三日とかや此嶋に來りて死す或は其己れか死期の時日を察し是を告て立なからに死せしとも云傳ふ因て嶋を中將嶋又は往生嶋とも云ふと然るに近年ホコラを建て若宮と號す是は其比母木の里に兩國梶之助とて名譽の角力取あり幼名を彌太と云ふ中將渠を愛する事兒孫の如し彌太やゝ長して丸額の角を入れ名を中將に乞ふ中將よりて梶之助と名け且

曰く今日祝儀の証に何かせんと思へど我に寸鐵尺木の財なし汝幼きより角力を好む引手物には他一倍の力を與へ得さすべし假令我死後たりとも何國如何ある人に立向ふ時も一度我名を念誦せば必ず勝つことを得させんと懇に誓約を果して梶之助因伯兩州彼れに敵する者其名遂に天下に赫著せり是中將か誓言の違はさりし不思議として角力を好める輩中將の靈を祭て若宮と崇め勝負を祈ると云へり梶之助は寶永五年正月廿四日に死し墓は母木坂西の麓の墓原の中にあり

○富吉村

戸數十九○辻堂本尊阿彌陀○氏神牛頭天王(祭九月九日)○古城○ 母木より入る南の谷八町にあり奥は光本坂本の兩谷と分れて鹿野の町へ通す村より湊へ十五町二十七間也○古城 村の東にあり田公新介高家の城跡なり父を新右衛門と稱す本姓は日下部氏あり昔より山名の幕下にて世々國の守護代たる名家なりしとて天正の初此屋形と同しく藝州の毛利家に一味たりしが如何したりけむ忽ち上方へ内通し其事かくれ無かりしが吉川元春當國在陣の折柄なりしかば即時に軍勢を差向け城を圍みて是を攻む城兵防禦五日なりされども寡勢にて遂に落城せり時に天正八年二月とかや高家は龜井新十郎を侍て鹿奴の城へ落けるが此人隠れなき鳥銃の名人なりしかば龜井氏其術を習ひ受んと初の程こそ懇に馳走してありけれども其身得道ありければ何爾に薄情にふまひしかば高家止事を得す妻子を引具し鹿奴を立出上方へ赴かんと知頭を過さ毛谷の邊を行ける時獨梁の渡りありしか時しも春の末よて南風強く吹ける間内室風に吹取

れ橋より下へ落ちられたり川は雪解の水漲り瀬早くして終に死骸も見へすなれり無残なりける次第あり
 只呆れたる許りにて二人の子供を介抱しつゝ、やかて伏見へころ着たりけれ年月移りて毛利輝元其事を聞
 及び以前の事を捨て是を扶持せられければ毛利の被官となる其後輝元の息女を公家徳大寺殿へ嫁せられ
 ける時高家の子息其介錯に附られて徳大寺殿へ伺候し彼家の家禮となり今に相續すと民談記に見へたり
 當國にも高家の末子一人残り家臣木下某と云ふ者百姓となり母木村に居けるが之を養育し成長の後田公
 孫左衛門と稱す諸國を遍歴し後には唐土天竺までに推渡り歸國して了戒と法名せり里人呼て了戒孫左衛
 門と云けると系圖を木下か家に置けるが酒津の百姓と木下と家柄の尊卑を争ひ口論して系圖を奪取ら
 れ田土の中に打込れて遂に失ひしとなり惣して母木酒津の邊に木下清水宮石等の氏を稱する百姓は皆田
 公家の被官の末と云へり了戒子孫は轉々流落し今鳥取城下に在て儒醫を業とする生澤守衛と云ふ者田公
 の正統と聞へたり按るに民談記に宮吉の城主田公新助高家と註す陰徳太平記に同じく出たり又天正年中
 吉川元春勝宿明神へ青銅寄附の證文に曰今度宮吉頼に落去と云々然るに今宮吉と云ふ處知れず田公城趾
 は富吉にあり思ふに昔日宮吉と號しけるを後世字畫を誤り富吉に作れるにや又母木酒津の邊を宮石と號
 す是は此地の氏神板井の神社の神體方六尺餘の石を以て形代とせる故に宮石の宮と云ひ此邊の惣名を宮
 石と云ふと云へり然らば宮石の和訓を宮ヨシと誤まり文字に宮吉と書けるにや○古河城 田公の城と道
 を挾て東にあり田公の出城にて東西十六間南北二十四間家老木下某出張せりと天正八年本城と同時に落
 但し本九共西表二十二間

法して其跡へ毛利の家人武部豊後守入りて是を守りしが秀吉公一國平定の後退去して廢墟となる木下七
 世の末葉とて母木古町に住する一農夫あり今治平其居宅の後田土の中方四間許りの平地に木下主従の墓
 とて五倫の碑碣十九基を安す當城没落の時戰死せるにや委しき事傳はふす右に註す田公の系圖を持傳へ
 けるか酒津の百姓に奪取れしは此木下か事にて了戒孫左衛門を養育せしも當家の事と聞へたり又天明の
 初比此城の南の山下土降して石郭出て其中に首二つあり一は大にして一は小さし二つなから甚赤し郭中
 亦朱丹を注けるか如し人集りて杖を以て之を動しければ大の方二つに分れ小は三つに破れたり其後大龍
 院禪師祭祀して舊の如く埋たり

○常松村

戸數三十三○氏神○藥師堂號東福寺本尊藥師長 行基○母木谷の東側にあり富吉の上九町なり當
 村辻堂の藥師は行基の作と云へり土人口碑に昔行基諸國巡歴の時當郡に於て一木を以て藥師佛七體を作
 り郡中所々に寺を建て藥師佛を安置えて本尊とす當所の寺を東福寺と號す是其六番なり然るに中古の亂
 に諸寺皆頽廢えて今各辻堂に安置せり今に傳へて七佛藥師と云ふは其故なりとぞ

○大澤見村 (東後尾。西後尾。長千代)

戸數五十六○辻堂阿彌陀○氏神板屋大明神(祭九月九日神領四石五斗八升)○池水後池と號す東西三町
四十五間南北五町二十
 間周廻三十五○坂本谷の東の谷隘なり此谷を水後谷と云ふ常松より北へ山越十六町なり母木より十五
 町四十五間

町其間に小坂あり村より高草の御熊村へ廿町其間の坂を佛峠と云ふ氣多高草の堺にて峠に誌しの立石あり難所なり凡ろ石を立て経界の誌とするを池あり鱒蜆等多し然れども腹臭く下品あり出村を水後村と云ふ昔は東後尾西後尾とて池尾の東西にあり今は東後尾のみあり今此地を奥澤見と云ふは大澤見の訛謬なり古記に大澤見とあるは高草の小澤見に對するなり小澤見昔は氣多に屬せり○板屋大明神 延喜式神名帳に載る板井神社是也神體方六尺餘の青石を齊ふと云ふ板井の神號其據を知らず按するに板井と云ふ里他邦にもあり山城の板井は下久世にありて清水の名所なり後惠法師の歌に古郷の板井の清水みく當國知頭郡に在るは板井原と云當所も舊地名を呼ふにや今土俗板葦大明神と云ふは俚言の訛り此類少からず

光本庄 (六個村)

○下光本村 (大杉。持木。山崎。三軒屋)

戸數五十八○辻堂阿彌陀觀音○穢多村十軒○氏神新宮大明神(祭日九月九日)同楯大明神○觀音堂(母木

大龍院持)○古城二(シッフリ山城一名堤知光城)○常松の上十五町にあり此より奥廣木迄六ヶ村を光

本庄と云ふ此谷は母木の支谷にて當村街道より西の離れ山山崎村北鼻にありより二谷に分れて西を坂本谷と云ひ

東は當村光本谷と云ふ鹿奴の東へ通て末持谷の川脉なり東側大杉と持木との間を東へ越れば高草に御熊村の上手へ出る是を岡谷越と云ふ兩郡の境にて持木より峠まで十四町峠より御熊谷へ六町あり○堤知光

城 持木村の下にあり小山にて小き構なり或はシッフリ山城とも云ひ筒見某の城趾とも云へり按するに今堤知光と稱するもの堤は和訓ツ、ミなり筒見と同じ疑らくは堤氏知光と云ふ人の持城なりしならん○大杉山の城 大杉村の後山にあり段々に構へたり然れども城主の名知れず按るに大杉は持木の上二町許りに在て其間に岡の谷と云ふを隔つ想ふ持木城は岩にて當城筒見氏の根城なるにや

○戸嶋村 (ハザマ)

戸數十二○辻堂藥師○氏神戸嶋大明神(祭九月九日)○光本谷の西側離レ山の南麓にあり下光本の山

崎村は此山の北の腰をめぐりて兩村山の前後を抱く其間六町也

○馬場村 (上垣)

戸數十五○辻堂阿彌陀○氏神六王權現(祭九月九日)○古城(在上垣)○戸嶋より三町街道より東側の山下にあり村の後に古城あり馬場村と云ふは昔當城主の馬場の迹なる故ありと○古城 上垣村にあり城主の名知れず或は塚手れ城とも云ふ馬場塚手は相並ひ一邑の如くあれば然云をならん

○塚手村

戸數六○辻堂親音○氏神八幡宮○馬場の上に隣る其間三町也或は戸嶋馬場塚手三村を東て上光本村とす今庄屋毎村に在て上光本の稱を失ふと

○廣木村

戸數十二〇氏神白山權現(祭九月九日)〇塚手の上三町にあり光本より鹿奴への住還道也

〇西分村

戸數八〇辻堂毘沙門天〇氏神牛頭天王(祭九月九日)〇古城〇廣木より十二町西の山下にあり其間羽田川あり但し此山も離れ山にて戸嶋村と羽田川を隔て、南北に相對す村の後ま古城趾あり其後は坂本谷にて宿村の勝嶋明神の社あり其より南鹿野の方を妙光寺山と云ふ〇駒ヶ坪城村の上にあり鹿奴の出城と云ふ餘程の設にて本丸及二三の丸等依然として其跡あり焼討したるにや焼たる米所々に出つ此山離れ山にて城の後西は宿村旁爾にて二三町上に勝嶋明神の鎮座あり

鹿野庄 (四個村)

〇閉野村

戸數二十三〇辻堂大日如來〇氏神稻荷大明神(祭九月九日)〇西分の南妙光寺山の麓にあり鹿奴の北の口にて廣木より通して十五町也其間に羽田川あり是より奥を鹿野谷とも未持谷とも云ふ當處蘿蔔の名物あり

〇鹿野 (水谷。西谷)

戸數東町百三十軒 上町紺屋町小屋人町 西町二百二十軒 下町鍛冶町山根 鉢屋村十一軒 〇御制札場之町界

牢獄在豎 〇氏神勝嶋大明神在宿村祭九月十日 同勝宿大明神在寺内村祭日九月廿一日 〇同住吉大明神在水谷村祭日九月廿日

小屋人社領一石八斗二升 〇少林山讓傳寺在町外 洞禪本寺防州月光山泰雲寺寺領三十四石九斗四升八合 〇

龜井武藏守茲矩の位牌並遺物數種あり占城旗。唐織陣羽織。今爲。金爛八丈袈裟。水晶珠數。獅子尾拂

子或曰。饒。旗檀葉。蟹甲の香盆。天狗之爪。駒角等也 〇境内有名古墳。鹿奴殿之墓在竹林中銘漫滅

祖橋氏澤應常山大居士 相傳曰木梨村藤山ノ城 〇般翁宗昌居士在庫裡之上慶長十年二月廿日 〇慧逢壽林

信女慶長廿年二月十八日 〇我叟勝全大居士在山中俗名松平玄蕃頭慶長十七年 〇凌泰山雲龍寺在愛宕山

麓曹洞禪本寺讓傳寺寺領三十六石九斗三升七合 有松平右京大夫綱政君之位碑 〇施無畏山觀音寺在紺屋

本寺高野山親王院本尊聖觀音緣起日寬弘 寺領六石二升四合境内有築山泉水石入君所作也 〇西向山淨土寺

年中殿村の郷士紀氏郷の息女櫻姫の作 在同所日蓮宗 寺領二石一斗一升一合有石入君御一門之位

在同所真宗本 寺領三石三升二合 〇鹿野山妙光寺在同所日蓮宗 寺領二石一斗一升一合有石入君御一門之位

牌。蓮葉院殿國清院殿花光院殿大雲院殿天性院殿秀光院殿雲窓院殿日梅大姉(石入君御息女良姫君) 〇解

脫山光輪寺(真宗本寺京西本願寺在鍛冶町) 寺領一石六斗一合 〇鹿野山幸盛寺在下町淨土本

九升一合本尊阿彌陀運慶湛慶兩作也 幸盛寺之額龜井茲布勢仙林寺半鐘 銘曰明應六年 境内有山中幸

盛之墓並日野五郎之墓 〇神光山成徳寺在町外一曰櫻谷山 〇地頭山三光院在下町真宗修驗持三

二斗六升觀音領一斗九升燈明領一斗四合 〇庚申堂在大工町右同派修驗子手院 〇修驗福本院在下町

門堂在水谷村 〇觀音堂號岩見山法龍寺本尊千手觀音因幡 鹿野之名義。恒河。跋提河。古城。杉原土居。

岩入君館舎之跡。同月見之亭。東照宮舊跡。石入君御内室之墓。同御息女之墓。湯次郎右衛門元辰墓。小式部産湯水之廢跡。獅子舞山。櫻谷觀音寺舊跡(在櫻谷)。靈龜山大應寺舊跡(在水谷)山名源七郎墓並岩村某殉死之墓(在同所)○土産。杉原紙。美濃紙。色紙。階田。同粉入。菅笠○ 閉野の南八町にあり事口の町を紺屋町と云ふ光本谷の通り也宿村より入るを鍛冶町と云ふ北阪本谷の通りにて光本谷と山を隔て、西に屬す洞谷口を小屋人町と云ふ巽末用村より通す水谷より入るを殿町と云ふ南河内口は大工町坤の枝道にあり大工町口は乾勝見谷の湯村道にて今市村へ通す此間川二つあり今市の方を土川と云ひ鹿野の方を恒河一名流砂川と云ふ町屋小路十町南北に亘り東西に長し御制場を界て二搦とす舊城下の名殘にて町外田圃の字にも吳服屋町鐵砲屋的塲彌次右衛門堀清藏屋舖など云ふあり 惣て町並奇麗にて農商相半す古城は妙見山にあり王舎城と號す總して當所は昔の遺風にや人の風俗優長なり諸道の細工人等有て事飲くことなく別府をなせり産物數種あり中にも菅笠を業とするもの半に過く古人の狂歌に「雨にさる笠ならなくに鹿野ある何七所笠縫の里」と詠ける其製作産品をれども風流は古に變らず鹿野笠とて國中專はら行はる當國方言物縫ひの産畧なるを七所飛ひと云ふは此笠の縫ひやうの故事と聞へたり民談記略に曰山を鷲峰と云ひ麓を鹿野と云へること何の世に名付たるにや故ある名稱面白く覺る侍る近比の領主龜井殿文字の才覺有て多くの物の名を改め賜ふ故これも龜井殿名付玉ふと云ふ者あれど神名記に鹿野社の名あり又古き記にも鷲峰などあれば往古より久しき名と見ゆたり鹿野より上の川を恒河と云ひ下を跋

提河と云ふ是も所の者は龜井殿名つけ玉ふといへとも三名皆佛國の名稱なれば昔より云來れるなるべし但し鷲峰鹿野の名により川の名は龜井殿付け給ふことも有べき歟と以上按るに鹿野と云ふ里國中二ヶ所八上郡曳田あり當所鹿野は或は志加奴或は志加野と書く皆鹿野の假名書にて奴野は普通なり○王舎城郷鹿野村南方妙見山にあり草創の時代知れず相傳ふ志加野某代々居城せりと按るに後太平記京台戰山名勢の内に志賀野氏の武士出たり家喜九郎討死の同志六人の内當城主なるべし何の比より相續せしにや舊き國侍にて山名の幕下と見へたり陰德太平記天文十二年雲州の尼子晴久當國亂入の時此城を一時に乘取志加野入道以下三百餘人が頭を切るとあれば此時滅亡せしならん其後永祿中山名源七郎鎮護として布勢より移住ある時に叛臣武田高信か爲に毒殺せられて當城暫く無主の廢墟となりぬ其頃山名家日を追て衰替し天正の初に至て毛利輝元の令を奉せしかば屋形豐國の息女を初め家臣森下中村等人質二十餘人を毛利の手より此城に入置三吉三郎左衛門進藤豊後守を大將として選兵一千餘人をして是を固めしめたり同八年秀吉公來伐の初此城を追落し人質を取らしめ龜井新十郎をして是を守らしめ且鳥取へ内意を通して和議を談せらる此に於て豐國毛利を變心して秀吉に屬せられたり時に毛利家爪牙の幕下杉原播磨守當城を攻むる事數日なり龜井防戦して城を保ち得たり其後豐國の臣異心を懷き主人豐國を鳥取を追出し而して人質を取返さんと森下中村等推來り多勢を以て當城を攻る事甚急なり龜井之を欺き人質を返さんと約して圍を開かせ豐國の息女一人を助けて其外二十餘人の首を刎て敵陣へ送り豐國の息女を携へて播州へ走て秀吉公へ渡しける

と眞書大閣記に見ゆたり其明九年秀吉公鳥取の城を陥れ一國平定せしかば賞美として龜井氏に當郡一萬三千石を賜り居なりに當城に在て武藏守と改名し城普請等經營せらる其後慶長五年關ヶ原の軍功に因て東照宮より高草郡を御加恩あり二郡の主として三萬八千石とある城の内外今の町小路の有様は其時の普請の跡と云へり同十七年武藏守殿卒去ありしかは子息豊前守政矩其家を督せらる其時又五千石伯州久米郡の内御加増を賜はり都合四萬參千石を領知せられ城下も彌繁昌したりしが元和三年臺命に因て封を石州津和野へ移さる父子二代在城三十七年なり同年光政君因伯兩州管領し給ひ其時一國一城の外持城制禁の公命に依て常所の城も卸し捨られたり但し長臣日置豊前守此處を知行しける故山下に居宅を設けたりと云十六年の後寛永九年御國換ありて御當家御入國同十六年御家門にて御座しける松平石見守輝澄君薙髮して石入州宍粟佐用兩郡の主と號し玉ふ播州興禪君の御叔父なり故有て當所一萬石を領し播州より移住し賜ふ御館は城山の西麓にて築山泉水の跡今に残れり斯て廿餘年の後逝去せられ御嫡子能登守政直君播州粟賀に歸り給ひて後館邸に住む人なく自から荒廢に歸す城は良の方を前とし本丸二丸塀重門塀風櫓内塀外塀藥研堀皆二重石垣にて橋の跡迄依然として残れり城後を切通しと云ふ昔は連綿と山羅りしを武藏守殿深山より水を引き山を流して堀切とせられしとぞ或説に城門北を大手とす山高さ百三十間城内東西十六間南北八間山中北の方古井あり深さ七十尋冬水七分夏三分塹東西二百九十二間横八間古は深く今は淺く水一尺五六寸城山東西は田なり南は山なり北は鹿野町なり町より山下に至て二百七十間城山周回七町十間馬寄ともと云々又或説に當城は中古山名氏の時當郡

押への出城ありとも云ふ○杉原土居 津盛守の境内にり天正の初藝州毛利家より妙見山の城を人質曲輪として番兵を置て護らせけるを秀吉公來伐の初先つ此城を追落し人質を取らしめ龜井新十郎を初め赤井福井武田など云ふ者彼は大將五六人を籠置き其身は播州へ歸り玉ふ時に杉原播磨守盛重を大將として矢田七郎左衛門等毛利家の命を承り鹿野の城を攻ける時此所に土圍を築き陣を張たる跡と云へり石垣は寺の後にあり今は墓原となりて尼子の家士日野五郎か墓もあり門前田土の森の中に盛重荒神として杉原が靈を祭れる祠あり盛重は備後國神邊の城主なり天正の初元春隆景に従て當國に來り毛利家に忠貞を盡しけるが後病死せりと陰徳太平記に見へたり墓は母木富吉の山上にあれば當郡にて果たるならん歟又或説に盛重此時の合戦に討死しけるが其怨念依草付木の精靈とありて此邊の人に崇りを成ける故一社を建て神に祭りけると何れか是なるを知らず○恒河 鹿野の西の口を流るゝを恒河と云ひ或は流砂川とも云ふ水源を鷲峰山の南河内谷に發して鷲峰村の下にて分れて二派とある西の一派は小川にて勝見谷へ通す東の一派は鹿野の方へ流れて玉川村の上にて又二派とある西の流れを玉川と名け東の流れは鹿野の西を下る恒河是なり此れ玉川村の下にて一つに合して宿村の方へ流るゝなり○跋提川 此川は鷲峰山の北の麓水谷の小畑より流れて鹿野の東町小屋人町上町を横流する是なり此川に懸れる石橋をタハコ橋と云ふ末は宿村の上にて恒河と一つになる其所を落合河原と云ふ川幅廣く宿村の向ふ勝島明神の山下をめぐりて戸嶋山崎の後にて羽田川末用川の流下の流下に合して其以下一派となり水勢山崎山の後麓にあたる所を山崎淵と云ふ其より二

本木坂本の前を通りて母木の西の濱路をよこぎりて海に入る惣名は鹿奴川にて其所々にて坂本川と云ひ又母木川とも云也土人口碑に河内川昔は皆勝見郷に落けるを龜井殿の時母木の海より坂本谷へ船を通さんどの目論めて玉川村の下より宿村の方へ切落さる故に武藏川とも云ふと落合河原も其時よりの名と聞へたり然れども其事遂に成らずと云へり按るに民談記に鹿野より上の川を恒河と名け下を跋提河と云ふ不審鹿野の地にて上下と云ふは東を上とし西を下とすれとへば東の町を上町と云ひ西の町を下町と云ふにて知らる然らば民談記所謂東の川を恒河とし西にあるを跋提河とすは大なる齟齬と謂ふへし若川上川下を云ふあらば一河に二名を稱するにて是も亦間違あり想ふに編者其土地に到らず傳聞の誤あらん又此川の名も近代の義にあらず治曆年中當所施無畏山觀音寺の寺譜に鷲峰鹿野雙林恒河跋提河等の名見ゆたれば往昔よりの名なるべし○山中鹿介幸盛墓 幸盛寺本堂の後左側にあり石垣方一間許り高さも凡そ同じ其上に無縫塔を安して臺石に法名を彫刻す爲幸盛寺殿潤林居士天正十一癸未七月二日沙門城蓮社照譽上人建立と鹿介は雲州富田城主たりし尼子家の浪士あり此地に墓を建る事は龜井武藏守殿由緒有てせられし也其仔細は武藏守殿も舊尼子家の被官にて初は湯新十郎國綱と云ひしが十七歳の時當國に落來り近縣山宮村村井覺兵衛と云ふ百姓是も雲州浪人なりしかは其家に養はれ居られける時鹿介は出雲を立て丹後但馬を経廻り當國を横行す固より智勇人に超へ當國に入て後城を落す事十三ヶ所なり新十郎古傍輩の因あるを以て鹿介に隨從し所々に戦功あり幸盛其勇氣を稱譽し己れが娘を以て之れに妻す此女子實は尼

子の一族龜井某と云ふ人の女なり龜井早世して其妻其娘を俱して鹿介に再嫁せり鹿介彼娘を新十郎に娶して龜井の家を再興せり此に於て湯氏を改め龜井新十郎と名乗りけるか終に氣多高草兩郡の主に掛せらる是偏に鹿介か後見の恩德によれりと幸盛の没後追懷の情止むことなく新に寺を建て鹿介か實名を呼て幸盛寺と號し自筆の額を掲げ遺髪を葬埋して永く報恩の追善を修せられしこと誠に殊勝奇特の事ともなれ按するに鹿介は天正六年七月二日備中國河部川阿部の渡りと云所にて毛利輝元の討手に討れたること諸書に見へたり今此石碑の年號とは相違せり此寺は文祿元年の創建なれば石碑を建たる時の年號とも見かたしいふかし寶曆年中古碑の銘の寫しを見るに碑碣は五輪にて臺座に幸盛寺殿潤琳淨了居士慶長十三年二月廿五日沙門城蓮社照譽上人建立と書けり然らば今の無縫塔は寶曆以來の造りかゝるにて慶長より寶曆に至て百四五十の星霜を経れば文字漫滅して年數を誤り記したるもの歟此の照譽上人と云へるは當寺開山の住持なり此石碑何として武藏守殿造立かくして照譽の立れるか但し初めの石碓は武藏守殿建立なりしを破損して照譽是を再建せしにや扱又龜井殿は禪宗にて讓傳寺の大檀越なるに其寺にては此事なく別に淨土の新刹を立られし事鹿介は淨土宗門にてありし故ならんか此墓の周邊數多の古墳は鹿介家來の者共の石碑ありと云へり○日野五郎之房墓 是も同所本堂の後墓原にあり其所を杉原土居と云ふ北の角三圍餘の松下に五輪を安す高さ四尺二寸臺石に高譽壽性居士文祿三年十一月廿五日と彫刻す文字半漫滅して明に見かたし是も尼子右衛門督晴久臣下の勇士なり尼子家没落の後當國へ流浪し日を送りける

か文祿元年郡主龜井氏朝鮮へ發向の時之房未用村牛房山に私城を設け龜井の留守を侵し寺社を破り寶物を亂妨せしかば其明二年龜井殿歸城の後塩治氏大塔時氏等を討手として牛房山を攻む之房戰破れて擒となり赤坂の振分と云ふ處洞谷西麓にありにて首を刎られたりし其死骸を葬りし也後太平記曰秋宅庵之助日野五郎は能美郡へ討向ひ七百餘騎にて控へたりと或説に庵之助と云ふは日野五郎か假名にて別人にあらず山中鹿介同侶にて十勇の助名を立たる其一人あり之を尼子の十助と稱す十助とは山中鹿之助寺本生死之助秋宅庵之助尤道理之介今川鮎之介藪中荆之介横道兵庫之介小倉鼠之介植田早苗之助深田泥土之介是なり晴久の時四萬騎の中より千騎を撰み千騎の中より百騎を撰み百騎の中より大勇十騎を撰みしとかゝる拔群の勇士なれども尼子の家運つたなく此地に戮せられける事惜べし○精林院賀屋珠慶尼姉之墓右同寺にあり五輪の碑高八尺五寸餘慶長十九年正月廿三日と彫刻す是也或は龜井武藏守殿後妻の墓あり前妻は前に云ふ鹿介繼娘にて其腹一男子幼名鬼太郎の有けるか七歳にて死去ありしかば母堂これを深く歎き終に剃髮染衣の姿となり一生を京都に終られけるとなりさるに因て武藏守殿後づれし玉ふなり是は家臣多胡宗次右衛門と云ふ人の女子にて此腹に誕生ありしを豊前守政矩と稱して龜井の家相續ありし也宗次右衛門は武藏守殿の伯父にて其子を多胡主水と云ふ代々龜井家の執政なりとぞ○石入君御館之跡 城山西麓にあり石入君と申すは播磨宰相輝政卿の四男松平石見守輝澄と稱す東照宮の御外孫にて興禪君の叔父君なり播洲安栗佐用二郡六萬石を領知し玉ひ從四位下侍從に昇進し玉ふ然るに寛永十六年家中不慮の騷動

出來て御領地召上られ御當家へ御預の身となられたり其時公儀より堪忍料として播洲曾根にて一萬石下されけるを御當家へ御收納なされ其替地として當郡の内一萬石を進せられ鹿野へ移住し玉ひけるが御薙髮ありて石入と自稱せられけり斯て二十四年御謫居ありしが寛永二年四月十八日卒去し玉ふ享年五十九歳とかや法名大雲院殿一關徹心大居士御遺言に因て叡山へ御葬送ありて當所興國寺と云ふ寺に位碑を殘し玉へり其後御館をこぼら今は築山泉水の跡のみ残りて舊墟は名のみなり勝見湯村の御茶屋は此材木を引用ひ玉ひけるとぞ享保五年鳥取の失火石黒に燒失したる興禪寺玄關の唐破風は御館の式臺を其儘用ひたる造作にて今時には珍らしき作事にてありしと語り傳ふ○石入君月見の亭 中惶西の涯に其跡あり石入君敷嶋の道を嗜み給ひしかば毎に此亭にて歌詠玉ふと或時鹿野八景と云ふ題を作り玉ひて京都竹ノ内三位殿とかやに其和歌を頼み玉ひける其題に曰洞谷夜月。母木片帆。少林晚鐘。水浚晴嵐。鷲峰殘雪。勝嶋夕照。玉川夜雨。城池寒鷺。是なり此中城池寒鷺と云へる題「水鏡みてや止なん白鷺の身のしふ池につばさしをれて」とぞん聞ひしは石入君詠給ふと云傳へたり此外郡中たま／＼御自筆の和歌を持傳ふる者あり○東照宮之廢跡 石入君館舎の西の山下二町許りにあり是は石入君此地に御座ありし時御勘氣の御身ながら正しく神名の御外孫にまし／＼ければ御神靈を勸請をされ朝暮御崇敬ありしなり其比神事は勝宿の社司飯田某之を執行し春秋二時の祭祀怠りなかりしと石入君の後は其事斷絶しければ宮社を勝宿神社の後に移し奉りて末社の一神とす今も勝宿の末社の中に東照權現の神號あるは其故と云ふ舊地は

陸田と名して社司の所得となりぬ昔は御神影もまし／＼けるが今は行方分らずと○石入君御内室之墓
鹿野町外東の田の中にあり四方土手を築き傍古松三本銀杏樹二本あり石碑無縫塔にて上に題目を書し其
下に天性院殿瓊林貞梢信女慶安四年辛卯十一月十六日能登守正武建之と彫刻せり是は讃州高松城主生駒
讃岐守一正の息女にて石入君御内室に御座せしが此地に卒去なされしなり其比此所に興國寺と云ふ古刹
の有りしかば其寺に御葬送ありしなり其後元祿十三年に興國寺を鳥取へ引玉ひければ其跡は荒野とあり
今僅に三反三畝餘の田圃の中に古墳のみ残りて是を興國寺跡と云傳ふる也扱興國寺は鳥取治工坊に新に
地を頼り天性山瑞光寺と改號して興禪寺の末山とし鳳山と云へる僧を住持と据へ是を中興の開墓とせり
近年又治工坊を轉して栗谷東の山下に移す今の瑞光寺是なり按するに興國寺は昔より臨濟宗にて黃壁一
派の禪林なりし事雲龍寺の寺譜に見へたり石入君は日蓮宗にて御一門の位碑をも當所妙光寺に安置し玉
へり然るに此御方をば禪宗の寺に葬り玉ふは故ある事にや但し御自身は御遺言にて叡山に御送葬ありし
となれば皆思召を以ての事なるべし○石入君御息女良姫君之墓 鹿野の東北葭か谷と云處にあり是も碑
碣は無縫塔にて正面に題目を書し臺石に法名を彫刻す雪窓院殿日梅大姉正保四年亥十月十八日施主松平
采女正直建之と是は御母堂より先にかくれ給ひしを妙光寺に御葬送ありしなり施主采女正直とあるは能
登守正武君の初名にて良姫君の御舍兄なり石碑都度の高さ一丈許り也○湯の次郎右衛門墓 同所南の丘
にあり石碑は五輪あり總高さ七尺許り妙法蓮華經と五級に彫刻し臺石に法名を書す實相院覺理日意大徳

慶長二十乙卯年三月四日と見えたり右の傍に日佐々木末孫雲州住人湯次郎右衛門尉源元長石塔也舍弟湯
采女正元綱敬白と三行に註せり是は龜井氏の家臣にて舊は一族也葭か谷は妙光寺の境内也○松平右京太
夫政綱君之位碑 凌泰山雲龍寺にあり法名雲龍院殿涼岫蔭公大居士寛永八年七月廿九日とあり是は此地
に卒去ありまには非す石入君の御弟なるを以て石入君御謫居の時當寺へ御安牌なされし也雲龍の寺號は
此法名を稱する也但し寺は寛弘八年一條法皇の追福の爲常郡の知主中納言紀氏郷の建立にて双林山無上
大涅槃寺の舊迹なり中古頽廢しけるを天正十八年讓傳寺九代忠岳宗恕禪師是を再興す其時仰雲山涅槃寺
と號す慶長中凌泰寺と改むる事故有て龜井武藏守殿法名凌泰院を稱す今又凌泰山雲龍寺と號するは兩侯
の法號によれるなりと○小式部産湯之水 鹿野の東田の中に小丸山と云ふ一丘あり此山下に小式部産湯
の水とて小き池ありしと是は昔和泉式部京都に在て某の胤を好して當國に歸り由縁あつて此里にて小式
部を産み其身は又京に上りけるが小式部三歳の時京より使來て都へ連歸りけるが其産れける時彼の池水
を産湯に用ゐける故傳て小式部産湯の水と云ふと按するに和泉式部は高草の湖山の産なり後都に上り一
條院後上東門院の女房辨内侍たり後に和泉守橘道貞の妻と成て小式部内侍を生めり道貞死して後丹波國
藤原保昌に改嫁せりと當國は故郷なればさる事のあるまじきにあらず小山と號するは多分穿ち壞て山の
形僅に残れり或は墓原となし其周圍皆田圃となりて池の迹と云ふ所も定かからず○獅子舞山 同所にあ
り孤山なり其形獅子の狂ひ伏たる如くなれば名くと又鹿園白妙集と云ふ記録に曰孝元五年辛卯鷲峰の三

神獅子胡馬に駕て聳岡に天降り祓麻して神遊す其詞曰く多賀貴屋摩安利富滿幸威滿幸愛敬幸獅子胡馬
不用とくり返しうたい犬を放ち山を鎮す土俗此神獅子舞を用ひすとて祭祀に獅頭を振さるは其故也其
コメガキテカ聳岡とは獅子舞山是なりと云へり白妙集と云へるは當所雲龍寺の記録なり何の書に出たる故事にや○
佐久良谷觀音寺舊跡 西谷の奥にあり其地を櫻谷と云ふ昔櫻樹多かりしと寛弘年中殿村の郷士紀ノ氏郷
の女櫻姫と云へるが直相の觀世音を拜せんことを誓ひ毎に六時の禮拜忘るゝかりしか一夜禪定の牀の前
に光明を見る怪て其光をしたひ行くに此谷に至りけるに樹下に觀音大士の妙相あざやかに現し給へり佛
勅ありしかば是にまかせ側なる櫻樹を以て其尊容を目から彫刻し此處に寺を建立し施無畏山觀音寺と號
して彼本尊を安置すと數百年の後郡主龜井氏其寺を鹿野の城下に移されける今の紺屋町の觀音寺是なり
と委しく縁記に見ゆ○靈龜山大應寺舊迹 水谷村 鹿野の坤位 三町にありの興一町西側山下に在り入皇六十五代花山
院入覺法皇回國行脚の時藤原の稀茂と云ふ人入道して御迹を慕ひ尋求れども御行方知れず當郡青屋の庄
より養郷の坂を越て此里に來り草庵を結びて止宿し當所住吉の神を祈る或時前の川より小龜一つ匄上り
て庵室に入る其夜の夢に龜の去る方へ往くべしと稀茂訝しく思ふ翌朝彼龜北に向て出づ稀茂も北國さし
て行脚しけるが越前國今井の城花見の岡と云處にてめぐり逢ひ奉りけると靈龜山大應寺は其稀茂住ける
庵跡と云傳へたり(白妙集)○山名源七郎殿墓 右同所大應寺山下にあり自然石無銘の碑碣也是は近世當
國の守護職山名左馬助誠通の嫡子あり幼にして父誠通の家を督き布勢の屋形と稱せしが永祿六年とかや

家臣武田高信謀叛に因て鳥取城を押領して逆威を振ひ國中穩なす源七郎殿當郡鎮護として布勢より鹿
野の城へ移り玉へり高信之を弑せんと計り女を以て是を誘ひ終に鹿野の城にて毒殺せり源七郎殿年二十
三歳とかや一國の屋形と呼ばれし人の碑碣も國中動亂の際之を修造するに暇なかりしにや法名も誌さず
只自然石のみ叢中に孤立する有様見る人哀れの涙を催さぬはなし其時源七郎殿と同年なりし岩村某と云
寵臣主人病中の形勢を見て彼女の所爲なるを察し其女を斬殺し其刀にて腹搔切て失せしとなり其墓も側
にあり石を積で塚とあす此地舊寺跡なるを以て塚跡數多ありて明に知かれし按するに民談記源七郎殿遺
骸は水谷の回龍寺と云ふ古寺に納め墓を築くと然るに此地は靈龜山大應寺の舊迹にて今も字を大應寺と
云ふ回龍寺は是なり奥小畑村旁爾にあり想ふに回龍寺も葬送して遺骸を此地に安置せしもの歟○住吉大
明神 水谷村東の山丘にあり山地境内長百五十間横百十間本社方三尺餘神樂所方二間花表の石柱南に向
く昔は五間四面の宗社にて巍々たる拜殿もありしと古き扉に「言の葉を手向の麻にひきはへて身を以み
よしの神にまかせん」と詠たる和歌のありしとなん以前は側に藥師堂もありしと木尊は住吉明神の木地
佛にて往古は奥の院にありしとかやは是は慶長年中凌泰寺の忠岳和尚四月七日摘華の序に此谷にて木佛を
得て一字を建立し瑠璃山藥師寺と名く然るに寛永の末比華嚴坊と云へる山伏彼堂に住けるがいつしか本
尊を京都に負去て失へり其後堂宇も破れ今は跡さへ知れずなりぬ○回龍寺舊跡 水谷村にある觀音堂是
也此寺往古は此谷奥岩宮谷と云ふ處に在て回龍華嚴寺と號し或は華嚴山回龍寺と號せし時もありしとか

や是は岩宮谷に岩權現とて熊野の神を鎮し奉る石宮あり其別當寺にて文應弘長の頃には鎌倉より供領として坂本郷に於て百石寄附ありし古刹なりしとぞ然るに天正の亂に供領没し寺も跡なくなりし事日久し近世元和年中凌泰寺龍雲寺の前號の怨閑と云へる僧回龍寺を再興の心にて此所に辻堂一字を建て昔の本尊とて石體の觀音相傳曰聖德太子作を安置せりと其後御國換の時凌泰寺無住となりしかば此里の嚴了坊と云へる山伏彼堂に住み己れか有として昔の寺號を倣ひ華嚴坊と云ひ或時は回龍坊と自稱えけるか是も過去て住む者も無かりけるが寶曆二年雲龍寺の住侶梅嶺と云へるか古跡の廢るゝを惜み是を再興て今岩見山法龍寺と號する草堂是なり昔の本尊石佛は如何かり玉ひしにや今は木像の千手觀音を安置し因幡順禮三十一番の札所とす按るに今岩宮山と轉稱する事此寺の舊地の名を呼ぶと云ふ訝し其舊地名は岩宮谷也是は熊野權現の石宮あるを以て斯は稱するなり土人岩見谷と云ふは岩宮谷の誤にて見の字更に其據を知らず

○小畑村(土俗云奥水谷村)

戸數三十〇辻堂毘沙門。天王〇氏神住吉大明神(在水谷村祭九月廿日)。○岩之權現。○古城(コンコノ城と號す一名躍見の城)。○水谷の奥十町餘にあり鹿野より十八町とす鷲峰の北の谷にて鬼入道へ越るを山神越と云ふ十五町坂道大難所なり。○岩之權現。水谷村の奥小畑を下を西へ入る支谷の詰りにあり其地を岩宮谷と云ふ鷲峰山東北の半腹にして水谷より十七八町登る也其山腹に並ひ立てる巨岩八九箇あり中に大なる巖の高さ七丈許り竹筒の立たるか如し其中間左右へ通りたる穴あり形細月の如く深さ二丈三尺穴口

高さ六七尺横二尺許りなり是熊野權現の舊跡にて土俗岩之權現と稱し或は權現岩とも稱するなり又其左右に並ひたる大石低きあり高さあり其低きは一丈餘高きは二丈或は三四丈に及ふ其形筒切の如くにて横文あり或は二重或は三重譬ば磨臼の重れるに似たり石上平にして廣さ各方一丈四五尺あり怪石と云ふべし參詣の人山腹をたどりて其石上に上り中の巖穴へ入て左より右の方の石上へ出る也又其下二三十間に籠り岩と號する巨岩あり是も形相同しく山上より崩れ落たる如く二三箇横さまに打重りて平地と岩との間廣さ五六疊にて人匍匐して入るへし信心の行者は此岩下に通夜をなして祈念す此外にも巨岩所々にあり形皆相同し昔は賢主の備流於此所海印を修し華嚴を以て爲勉貞享年中鹿野の土人權現宮の邊にて千手の銅尊を掘出せりと大工町の佛九兵衛然らば當時堂宇も有しと見ねたり偕又此神大に流行り給ひしは寛延三年の頃とかや當郡木梨村の百姓此神に病氣を祈りしかば奇瑞あらたに病忽ち全癒す其事郡中に流布しける間我も人も思ひくゝに病氣平癒を祈りける程に參籠七日にして盲者は其杖を捨て覺者は忽ち其足を踏ならして下山したりとぞ風聞日を追て弘く國中は云ふに及ばす後には伯耆出雲但馬播磨美作備前の邊までも其沙汰かくれなく參詣の群集日夜の分ちなく譬ば蟻の熊野詣すると云ふ譬の如く夥し常には人烟絶たる深山あるに俄に假屋を建續け籠り屋をしつらひ酒食を商ふとぞ繁華の市の如く山上山下町並をなせり今も其跡依然として残りかくて其年の秋比まで流行り玉ひしが其後次第に參詣人少く何時しか舊の如く寂しくなれり扱其時の賽錢米積て丘の如く夥しかりき然るに此神昔より權現と云ふ神號あれども今は主

なき捨石の如くされば此賽錢をやる方なきに就て誰も彼も其錢の欲さにや宿村の社人の云けるは水谷村は勝嶋の幣下也然らば伊和權現は此方の持宮なりと又鹿野の修驗三光院は是は熊野權現の鎮跡にて此地は舊山伏の加行を勤むる行場なれば此方の支配なりと云ひ出して雙方争ひとありぬ其につき申分多端になり遂に奉行所に訴へたり然れども元來野山の權現岩にて今更何を證據とすべきかき水掛論をれば奉行所にも是非の一決なり難く先づ賽錢は小畑村の庄屋へ預け置くへし追て裁判あるべしとの事にて争論忽ち止みぬと土人の口碑なりされば某の神は某の社人某の佛は某の修驗の支配とならば毎に參詣の人はなくとも争論はあるべからず鎮跡は神や佛やら夢に過して只此賽錢に打驚き俄に公事訴訟に出けるは豫ての不信心を自から白狀するに似て笑止と謂つべし○コンユノ城 一に汚登路免城と號す山名の幕下兵主源六と云ふ武士居城せりと天正の初め人並に藝州の毛利氏に屬しけるが龜井新十郎の爲に没落せりと云ふ其比龜井は秀吉の命を承け鹿奴の城に在りしが兩城の間相去る僅に十町に過ぎず互に用心堅固なり龜井思ふやう此城緩々とありなば必ず腹心の病たらん如何にも急に攻落さずんはあるべかかずと方便を以て先づ和睦をなし龜井も安堵の體にもてなしける折節七月雙方城下に躍を催す源六常に遊戯を好み潜に是を見物す龜井屈竟の折を得たりと領内男女の童をして汚登路免の山下に於て謠躍をなさしめたりしに城主を始め召使の婦女までも皆城を下りて見物しけり龜井思ふ儘にをひき出し伏兵を城の後より忍び入れて曲輪く火を掛しかば火船忽ち夜風に迸散し城内一時に燃上りける源六大に驚き歸らんとすれ

とも栖なく夜中にまきされて落失終に行衛知れずなりぬ龜井刀に血塗らす奇策を出して一朝に城を落しけり其れより躍見の城と呼ひけると今ヲトロメと詛りたるなりと本丸二の丸乾堀の跡今にあり餘程の構にて山上に馬場あり山下に倉跡もあり山も鹿野の城よりも高く打越て見ゆ此を堺て東は末用谷西は水谷故に末用コンコノ城とも云ふされと水谷の方を前とす今も躍見の田躍見の平として小治田村にありコンコノ城と云ふ事文字も知れず如何なる故の名なるにや或はココノ城とも云ふ

○末用村 (或作末持。一ツ家。法樂寺) 金山。木入道或作鬼入道)

戸數五十五○辻堂觀音○氏神稻荷大明神(祭九月九日)○久慶山法樂寺(曹洞禪本寺鹿野雲龍寺)本尊藥師行基作當郡七佛之内七番也○興國寺之廢跡(在二ツ江)○古城二釜谷ノ城○水谷より十町東の谷隘にあ

り村あり鹿奴へ十町也但し當村は谷の口西側にあり其奥五六町に在るを二ツ家と云ふ法樂寺金山は末持川の向ふ東側に屬て村と村との間五六町也木入道二ツ家の奥十町許りに在て其より奥に民家なし此谷の

詰りとす此谷は西の方は鷲峰山のなだれ東の側は高草郡の境洞谷峠より矢矯の無毛山其奥は野坂の河内の峠通りなり末用より洞谷峠まで十三町峠より洞谷村へ十五町五十間なり是を洞谷越と云ふ鳥取より鹿野への街道にて其間に末用川有て歩渉りす流下を羽田川と云伯耆中道通り是也此時にて晴天には隱岐國見也又木

入道村の下より東へ越るをセンツカ峠と云高草の境にて矢矯の無毛山の下手を越る也木入道の麓より峠まで七町峠より矢矯村へ十五町都て廿二町也但し此方より登れば道險し峠より高草の方は道ゆるし右町

數自から蹈試し所なり○稻荷社 此里の氏神也長保三年辛丑歲五畿内疫病殺人山陽山陰倒五穀失種子郡民祈て當郡に七社神廟を築く其長社也宣祝詞に曰天太神分魂御食保神台身成貴分身成福五穀精粗而鎮於萬歲飯成山云々是を以て其年八月上午の日立社和光本の溪間のすき白砂の灘頭に融す小社微なりと雖目の觸るゝ處亢として神樹綠々たり翌年壬寅の春法樂舎を立と雲龍寺の記録に見へたり○久慶山法樂寺 未用の少し上向ふ法樂寺村に在る藥師堂あり此れは昔僧行基行脚の時當郡にて一樹を刻て七體の藥師と名づ郡中所々に寺建て之を安す土人は是を七佛藥師と云ふ當所法樂寺も其内にて本尊は七番目の佛なりと中古此寺頽廢の後本尊を辻堂に遷しけるが慶長年中鹿奴の雲龍寺の末山とすと又白妙集に長保四年壬寅の春稻荷の法樂舎を立る本尊は聖武帝天延年中長和瀬の沖より網裏に入て出現す郷民抱き奉りて養郷の坂に投えて還る何者か又抱き來て此の稻荷の森の中に捨つ後に法樂舎を法樂寺と號し里の名とするや始は堂宇西に開き東を後にすと雲龍寺記録の趣なり此に據て見るに七佛藥師と云ふは當郡七社の稻荷の神廟法樂舎に安するを以て斯稱するにて土俗所謂行基一木七體の説と異なり按るに右記録聖武天皇天延年中海中より出現すと云ふ訝かし聖武帝の御宇に天延と云ふ年號なし天平の誤ならん天延は六十四代圓幡天皇の年號にて聖武天皇より二百四五十年後れたり思ふに行基は聖武の朝の人なれば土人口碑の如く其以前に寺を建て佛像を安しけるを後其寺滅却し本尊海中に没し玉ふあるべし然るに圓融院御宇天延年中再び出現し玉ひ當所叢中に座しけるを後二十餘年長保中保樂舎の本尊となしけるなふん郡中七所の

中六所は皆寺號を存す當所のみ法樂寺と號するは往古の寺號傳はらざる故と見ゆたり白妙集は近比聞書の記録にて玉石混淆す傳聞の誤をんら○神和山神光寺舊跡 白妙集に始て稻荷の宮を此に築く其後十年を歴すして社地を今の所に改むと按るに是もと寺跡なり昔行基七佛を安置すと云ふは此寺の事ともにや○千本塚 千本と云ふ處の道の側にあり昔神光寺の邊に尼寺あり伯州車尾の尼寺の流なり今も一反余尼屋敷と云へるあり常に尼僧三十余人有て菩提を營む其比墓を千本の地に築く故に千本塚と云ふ尼等唱歌をもてありひしと云ふ處千本の近邊にありと白妙集に見ゆ按るに千本塚と云ふ所今明かに知れず雲龍寺門前より未用の方へ通る道の側に六千墓と云ふ一丘あり石地藏を安置す道の側なれば此なるにや○權僧正由心之墓 木入道村民家の後にあり寶經印塔を安す土民木入道の墓と云ふ是なり或記に由心は和州吉野の勸僧にて大徳の人あり南朝の建徳年中吉野の佛閣兵亂の爲に修羅の巷となりて圓頂頭陀の形は堅甲利兵の姿となり三學滅盡して白双骨を削る故に由心山を下り伯州三徳に入て竊居すること二年ろれより鷲峰に詣て後に古佛谷に住居して一把を蓋ふ僧正佛像を彫刻するに妙手なり或時鷲峰社宮より晒木三箇を得て此谷に於て觀音の像を彫刻す其一體今村裡の正像なりと其後高草郡野坂の羊腸たる路外に柴庵を結ひ居る今其跡ありて稼田四畝二歩土人三總田と云傳へたり後又未用の山奥に入て住けるが老病を抱て終に此地に寂せり故に墓を築き塔を建つ常に隨士あり春木入道と云ふ共に勸僧となり同居しけるが是も三四年の後に死すと云ひ或は此地を去るとも云ふ春木入道は彼に化し此に乞て道を造り橋を渡す中

比但馬國に往て山居す其地を春木村と云ふ造る所の道路を春木坂と云ふと此里を木入道と云ふは春木入道の畧語なるにや由心の二字を合して字形鬼の字に似たれば鬼入道と誤り云ふにや此所は人烟絶て孤猿の栖所なり人家のありしは元龜中なりしと由心の塔に梵字あり苔封して見へす此塔に金雉雌雄銀砂一囊朱砂一瓶を埋て後來之を得し者三徳を建立すへしと言遺せしと云傳へたりと今此村の辻堂に安する觀音を拜するに座佛長一尺許り右空手にて左に蓮華を拈し玉ふ丸莊嚴を加へたりと雖體相素より殊勝なり是由心の造れる正像なるにや○釜谷城 當村旁爾にて洞谷峠の南にあり鹿奴より東に見ゆる高山なり海老名氏代々の城址なりと云ふ太平記神南合戰山名勢の内に海老名和泉守と云ふ名出たり又參考太平記六波羅勢自害の内海老名四郎あり是も因幡の侍にて注文に曰く金勝院本に因幡守に作るどあり當城主の事あるべし外に海老名家の城と云へるを聞かず又鹿奴雲龍寺の記録白妙集正治年中鎌倉の代左府兼定末持釜谷の城に居住し後に櫻谷に入て入道すと國記にありと記せるは國記とは何の書なるや海老名より以前の草創なるべし○牛房山城 コンコノ城の尾續きにて其間纔に小山を隔てたりさしたる構にあらす文祿元年龜井武藏守茲矩秀吉公に隨ひ朝鮮征伐の時雲州尼子の浪士日野五郎之房と云ふ者私に當城を拵へ龜井の留守を犯し近邊の神社佛閣を破り少林獅山の寶物糧資を亂妨せり其明二年龜井歸して忿怒淺からす塩冶大塔寺を大將として牛房山の城を攻落し遂に之房を生捕て赤坂の振分と云ふ所に於て之を誅戮すと鹿奴雲龍寺の記録白妙集に見ゆ

坂本郷 (五個村)

○下坂本村 (沖村。三軒屋)

戸數八十○辻堂六(本尊) 藥師。觀音。阿彌陀。毘沙門。地藏) ○氏神竹宮大明神 ○梅應山大泉寺(曹洞禪本寺母木大龍院) ○靈火 ○ 當村母木の奥常松村と坂本川を隔て、西にあり是より奥二谷に分れて東を光本谷西を坂本谷と云ふ母木より鹿野へ通ふ平谷あり村の長さ六町許り村の下より西へ越れば日光谷に通す其坂を越路坂と云ふ坂本の麓より峠まで一町余小坂あれとも甚急峻なり日光の方は路緩く平地を行くが如く打越八町余なり勝見湯村より吉岡れ湯村へ通ふ路にて是を中道越と云ふ沖と云ふ支村田の中にあり中沖と云ふは今二本木村に屬す舊大村にて坂本は上下二村なり昔に辻堂八の有りしと近世亡所して今上坂本の名を失り土人口碑に天正の比此里に坂本助左衛門と云ふ巨農あり田圃三十六町を耕稼して庄司の如く越なく驕を極む郷中其下知に従はざるはなし常に藤布の白幡を作て己れか心に何か欲する事あれば其幡を立て、近村に之れを告く郷民應して來り集る事烏雀の群るが如しかゝる勢なりしが日比驕奢を恣にし法に過たる振舞も多かりければ龜井武藏守殿の時刑戮せられ其家忽ら斷絶し此里にも住人もなかりけるが十余年の後勝部郷若川村より百姓二人仁左衛門 與左衛門來て開出して一邑開け今に及ふと云ふ或説に龜井殿雲州より當郡に流落し便り少き折柄彼家を訪ひけるに幾度も主人薄情なるわしらひををしける

故かねて憎しとやねはされけん文祿四年三月六日武藏守殿從者僅十人餘召具し坂本か家に至り主人を搦めとり彼幡を奪ひ門前高く持あげしかば郷民競ひ來りしを龜井の家人鹽冶大塔寺等片端よりは是を擒にそ扱彼助左衛門をは高草郡野坂の郷士竹内國重と云ふ者子孫今松上村にありに引渡しければ國重三枚板を以て助左衛門を挟み殺せりと云傳ふ○靈火 當村の上二本木村と土居村との間にあたりて夜中野外に燃る火あり土俗に靈火と云ふ月のある夜は見ゆす雨の夜多くは是を見る或は此谷の村々所々に分れ散て定かならず人近づけば無し遠く望めば明かなり故に其火の起る所を知らずと或は坂本の沖村の古墳より燃出るとも云ふ此墓は龜井殿時代刑罰せられし坂本助左衛門か葬所あれば其靈魂此地に留まり嗔恚のほむらを散すならんと云へり按するに此類國中所々にあり他國にも又多しと其地幽谷或は海邊或は野外墳中より燃るもあり尤も温泉の地脉或は金銀銅山硫黄山等の邊には猶多しと云へり(中略)其外野火燐火等の説異同ありと凡天地の間不思議ある事多く所詮凡智の計り知るへき事ならず

○二本木村 (中沖)

戸數十九○辻堂二本尊藥師地藏○氏神勝島大明神(在宿村)○寶殿之松○ 下坂本より上二町西側の山下にあり村の西を山越すれば勝見谷の岡井村へ通して九町餘なり是を岡井越と云ふ峠より岡井の方へ五町餘り道よろしからず○寶殿之松 村の前田の中にあり木の大き二圍餘りの古松なり木の形ち如何にも物古りたり其地をゴウデン或はゴワウデンと云へり御寶殿の鄙言歎其邊田土の字もしか言ふなれば昔祭

神ありし跡ありしにや是より二三町上に櫻の老樹ありしと今は枯てなし其と此と二本の木を呼て里の名とすと然らば古名にあふす舊は坂本の内なりしならん歟

○重高村 (前上。片山)

戸數二十三○氏神勝嶋大明神(在宿村)○山伏本性院(三寶院派)○杉原重高之墓○ 二本木より四町許奥にあり西側に屬す此里の土俗に狂言歌舞伎のものまねをさせり重高萬歳とて其名聞へたり近世當郡濱村に名譽の歌舞伎役者あり後江戸に往て名を天下に馳す元祖瀬川菊之丞と云ひしは是あり屋號を濱村屋と號するも其謂れと云へり○杉原重高之墓 今場處明かならず鹿奴雲龍寺愛宕山の記録に曰弘治年中杉原盛重嫡男重高入道喩元當郡を領し當社を没倒して居城とささんすと天力疾立立て自縊す今重高村に古墳あり土民壤て麻畑とすと按するに杉原播磨守盛重は備後の國神邊の城主なり天正年中吉川元春に従ひ當國に來り無二の忠貞を勵みけるが終に當郡に病死せり其子二人あり兄を元盛弟を景盛と云ふと陰徳太平記に見ゆたり弘治は天正より二十年も以前の事あれば其比重高と云へる嫡子有て當郡を押領し此所に死せしならん想ふに今此里を重高と號するは其名を呼來るなるべし然らば古名にあらず舊坂本の内ならん

○土居村 (沖土居)

戸數二十三○辻堂本尊地藏○氏神勝嶋大明神(在宿村)○樹應山正壽寺(曹洞禪本寺母木村大龍院)重高の奥三四町にあり村の上外れを西へ越れば勝見の妙見谷へ通す打越七町許ヒへ谷坂と云ふ當村本名片山

なり故に片山土居とも云ふ然るに片山今は重高の内に属くこと訝かし土人に問ふも其故分明ならず想ふに寛文以來片山村絶て土居を本村とし其後重高より片山の古地に出村しける故かくの如きか

○宿 村 (中伊勢。上伊勢。新田)

戸數二十八〇氏神勝嶋大明神(祭日九月十九日社領十六石四斗五升)○觀音堂○土居の上四町餘にあり是より鹿奴へ十三町也鹿野雲龍寺の記録に宿村は村上天皇第六皇子勝美親王當郡の知主紀ノ氏郷の女櫻姫を戀慕し天延年中王宮を出て當郡に到り此里の叢屋に宿り玉ふ故に宿村と云ふと虚誕なり委ましくは寺内村勝宿明神の下に註す○勝嶋大明神 中伊勢村の川向ふ乙山の山腹にあり境内二百五十間四方本社方一間兩扉付九拜殿 豎二間鐘樓 方七尺鑄鐘の華表銘曰魏魏兩柱以象陰陽至哉神德萬世有光寶曆六年秋九の内蝶の御紋 拜殿 横三間鐘樓 年號元祿五年 月日凶居長久氏子繁榮惣氏子建立之と彫刻せり凶の字國の字の浸滅歟或る説片嶋明神或は勝四魔或は勝四間或は下伊勢大明神とも云けると按るに中伊勢と云ふ地名あれば下伊勢と云へるも有べし是地名を稱する神號ならん片嶋明神は勝嶋の訛謬ならん總四魔勝四間は勝嶋の假名ならん歟延喜式神名帳に載之因幡國五十座の内當郡五座の一神志加奴神社是なり一説殿村郷鷲峰村に祭れる鷲峰大明神を其神趾と云ふも恐らくは非からん按するに鷲峰は山の名にして其處に鎮座の神あるを以て鷲峰神と稱するなふん延喜式に志加奴神社と云ふは鹿奴と云里有て其地に祭る神なればなり餘勝嶋を以て志加奴神社と云ふは此の神舊鹿奴村に在りし故なり 其古地名鍛冶 天正年中龜井氏鹿奴在城の時其社地山下の街心にあるを以て神

祠を比志也久日と云所地戸か谷邊今田に移し後又宿村今の地に遷せり故に今に於て鹿奴の土人半勝嶋を以て氏神とす 東の方勝嶋 西の方勝宿 是其證明らけく往々土俗の傳ふる所紛亂なし鷲峰社又其神趾と云ふ未だ其據を知らず鷲峰の神は三代實錄載之鹿奴の神は延喜式に載たり此二書は醍醐天皇の勅撰にて共に其時を同ふす然るに一書には鷲峰の神とし一書には鹿奴神とすべき謂れなし是等を以て見ても明瞭すべし或は鷲峰の神は其祭る所大己貴命にて此神別名葦原醜男なり醜男の古の假名は加と通し又醜男の遠の假名は乃と横通すれば志加乃と轉す又乃と奴と相通すれば志加奴なり之を以て志加奴神社は醜男神社と云ふ意に叶へりと云ふ説あれども只是一己の分別にて其徴とすべき處なし畢竟好事者の臆説と謂ふべきにや

勝宿上の郷 (五個村)

○玉川村

戸數三〇氏神勝宿大明神(在寺内村)○土産茶○鹿奴の西六七町玉川の西の平地にあり以前は玉川と流砂川との間の中洲に在りし孤村あり其地見渡し一町餘長さ四五町の河原なり昔は尙廣かりしも年々洪水に川脉定かならず何時しか土地狭くなりしかば近年民家を川より西へ移せるなり玉川は流砂川と源は一つにて河内の谷より流れ下て當村の上にて分れて二派となる東の方へ流るるを流砂川 一名恒川 と云ひ西へ分るるを玉川と云ふ村の下にて兩流一つに合て坂本の谷へ落るなり玉川と云ふ川高草郡にもあり當所の

玉川は舊しき名にあらずと云へり民談記曰龜井殿此邊の山に多く茶を植られたり唐の詩人盧同茶を好で茶歌を作る殊更一世の名詩あり盧同自から玉川子と稱す此名の字自から茶の所産の地名に合たるも面白く侍る或は龜井殿茶を植られし後此名を改めつけられたりと云ふ人ありと又雲龍寺の記録に此所以前森川原と云ふ雲州玉遺より善四郎と云ふ者來り住す武牧彼れか爲に茶園となして與ふ其園今は田となる然れども元來畑なる故水道なし玉川先生か歌に平生不平事盡向毛孔散と玉川と號するは武牧以て爰云爾となりと記せり以上或説曰茶を植たればとて玉川子に比して玉川と云ふ事音語を和訓に讀み變て玉川子か事に聞ゆべけんや巧み過たりと云ふべしと又或説に貞享年中此地にムクの木有りければ瀧川一貞と云人六所玉川には和歌を賦し名所ありこゝにも歌よまんとてムクの木に狂歌をよみて付たりと「ひくろゝの黒さは娑婆のこのみなりくたきてみれば面白のみや」

○今市村

戸數七十○氏神勝宿大明神(在寺内村)○圓光山松泉寺(曹洞禪本寺鹿野讓傳)○觀音堂因幡順禮三十番札所別當山伏吉院○玉川より八町下にあり伯耆中道通りにて鹿野より十二町四十間其間に川二つあり流砂川皆歩渡り也村の中に街道あり正直に通りにて左右の家並城下の町の如し龜井武藏守殿葬送のとき此道を作ると云へり當村の東の方に玉川の末流あり水高菖を生す早春の末より川底の石の間に生す其形ち雞兒腹に似たり當所二三町の間にありて其上下になし川上鷲峰村にもあり

○寺内村

戸數十七○氏神勝宿大明神(祭九月廿一日)社領三十九石六斗九升三合神主飯田氏禰宜戸板氏○久昌山長安寺(曹洞禪本寺鹿野讓傳)○寶照寺の舊跡○大塔の跡(有礎)○野雞山○飯田の森○明星か鼻○明星谷(明星泉)○龜井武藏守茲矩之墓(在明星鼻)○今市の下九町にあり街道より西の山下に屬す寺内と號するは昔勝宿明神の別當寺寶照寺と云ふ寺の境内なりし故なりと○勝宿大明神 村前竹林の中に鎮座あり延喜式神名帳載之加知彌神社是なり祭神中殿彦火々出見尊左は鷓鴣草葺不合尊右玉依姬の三座也本社三間神樂所豎四間半鐘樓方七尺隨神門豎三間橫二間花表東向石柱高一丈隨神門より花表に距て一町半左右四方神樂所橫二間隨神門左右有看督長花表東向五尺橫一丈隨神門より花表に距て一町半左右松原あり其間に二派橫流許有石橋各幅一丈末社十一神社地廣東西二百間南北百間郡中の長社也古來此地を飯田森と號す林木生茂り木立ものふり殊勝なる景致なり今の社は寛文十三年の再興也内陳の扉は永祿八年武田高信矢田幸佐田公高濤等か建立のときの扉にて其後兵火に罹て表は一面に焦爛し或は矢の穴太刀の痕數多あり裡には龜井武藏殿樂書など殊勝にもものふりたり社司口碑に其比の兵亂に彼の扉を引はづして楯とあしける故是のみ残りて其餘の寶物傳來の社記等宮社と共に燔滅せり今ある所の唐織の戸帳双節の竹玉石等又社地に枳椇本あり圍八尺餘是等は皆龜井殿朝鮮歸陣のときの土産なりと云ふ雲籠寺の記録略曰勝宿明神は人王六十二代村上天皇第六の皇子勝美親王を祭り奉る國記に曰當郡の知主紀ノ氏郷の女櫻姫は扶桑無比の美人なることを遠く聞て戀慕し玉ひ後王命を以て招すれども姫固く佛心に便りて嫁せず天

延三年王子竊に王宮を出て此郡に至て叢屋に宿す其所を今宿村と云ふ王子慣玉わぬ旅路に倦て病を發し玉ふ從者藥を求むれとも醫なく終郡主に之を訟ふ知主氏郷父古大納言氏常入道走り來て親王を輦にのせ殿村の館に入奉らんと供奉して小坂を越ゆ其坂を神越山と云ふかくて野溪山に至る親王半途にして其所に薨す時に天延三年六月廿一日なり其後三霜を経て貞元二年九月下浣勝美の神社勝宿寶聖宮と祝奉る此時に至て勝上勝玉扈從に神託して曰く假に王舎を出て野溪の魂となりぬ鎮に國人の寶照と爲て四時夫れ治ん故に勝宿寶照權現とも云傳へたり今の社地飯田の森は百年の後宮を築くと以下略を按るに勝美王子此里に薨し玉ふ事其眞否知るべからずと雖其靈を祭て勝宿明神とすとの説は妄誕なり當社は延喜式神名帳に載之加知彌神社と號する是にして加知彌は勝見の假書なり古來此谷總名を勝見の郷と云ひ里を勝勝宿村と云ふ故に加知彌の神社と稱し或は勝宿の明神と稱す是上世地名を以て呼ぶの神號なり今勝宿の郷寺内村と云ふは近代變名に或は曰く當郡は勝美の王子落命の地なるを以て専ら勝の字を用て地名とす勝部勝見勝山勝宿勝嶋皆其故あらんと彼記録に見たりとは是も亦無稽の妄説と云ふべし勝見勝部は和名鈔に出たり和名鈔は村上天皇の御宇の書にて其時代は同じと雖天延以前天曆年中源ノ順勅を奉して上古の故實を輯録せしこと明らかし思ふに勝見勝美和訓相同しければ後世附會して云へるならん勝見温泉由來記と云ふ一書を見るに此邊の事蹟を尋もなく書綴りたり勝宿明神は何の世の王子ならんか紀ノ氏郷の女を戀慕し此地に到て戀情の契をかはし玉ひけるに或時此姫鹿奴の奥水谷と云ふ所にて沓を脱ろるへて消失ぬ王子再

ひ歸京し給はず此所に幽居し玉ふ社にて上代神階にまします神ありと記せり是も前と同説にて評するに足らずと雖昔より此邊にて言習はせる事と見たりれば勝美親王の故事も全く迹なき虚言にもあらざるべし若まや此邊の末社の神として祭祀せる事ともありて勝宿の神と混淆して云へるよや此類所々にありて事實を誤ること少からず高草郡松上の神靈を叡山の座主と云ひ邑美郡行徳の聖大明神を遊行上人とも高野ひじりを祭れりとも云の類ならん○寶照寺之舊跡 村の裡にある藥師堂是なり此は昔勝宿明神の別當寺なりと本尊藥師如來行基の作にて郡中七佛第四番の一鉢なりと云中古退轉の後本尊を辻堂に移して昔の寺號を呼て寶照寺と號す今は藥師堂と云ふなり堂前街道の傍に塔の礎と云ふ大石あり傍石地藏を安置す石の大小 高二尺五寸周 正中に穴あり 徑一尺九寸 寶照寺塔の心柱の礎と云へり當時は巍々たる大寺なりしと見たり雲龍寺の記録に嚴家の寺にて古き棟札には眞言家の筆記ありと院内一町二反後に民家の敷地となる故に寺内村と云ふとあり近世讓傳寺十三代の住持永麟と云ふ僧寶照寺の廢跡を興して今の久昌山長安寺を建立せり正保慶安承應の間と云へり寶照寺の寺號土人は幸正寺と書き來れり何れか是なるにや按るに勝宿神社兩部習合の時寶照權現と崇稱せと云ふ説あれば寶照寺ならん歟寶照の音コウセウに近きを訛り後に幸正の文字を充たるも知るべからず○本地佛 長三 尺餘 勝宿の社中にありと未だ其實否を知らず雲龍寺の記録に寶照寺の本尊なり觀音免とて今尙あり享保九年三月雲龍寺の佛昂叟社司飯田攝津に申請て雲龍寺に安置すと土人の云へるは其にあらす寶照寺本尊は藥師なり是は兩部習合の時の本地

佛たるに因て後に氏子取返して舊の如く社内に納めたりと○野溪山 飯田森 勝宿明神の後西の山を野溪山と云ひ鎮座ある所を飯田森と號す又鳥居の向ふ東の山をも野溪山と云ひ其山の後ろ山林鬱茂の地を飯田の森とも云ふ宿村と勝宿村との間の山にて毎歲九月祭の時角力興行アル所也東西に同名を稱する事如何ある故にや土人口碑に勝宿明神初は當所ヤケイ山に鎮座なりしを後に山下今の社地に移し奉ると按るに土人の初め當所野溪山と云ふは宿村のヤケイ山より當所の山にうつり玉ひて後又山下に遷座し玉ふなるべし故に彼の地の名を此地に移して同名を稱するならん歟今宿村の祭神勝嶋明神攝社の中荒神一社勝宿の末社とす又勝宿祭事の時宿村より仕丁十五人來て神輿を守護する事古來のならばしとす是等の事を以て此神もと宿村の祭神たるの支證とすべし宿村よりこなたへ越る山路を神越坂と號するもろのかみ遷座の時越え玉ふ清路なるを以て斯は稱するならん又里の名勝宿と號するも宿村を本としたる名義にて勝見郷の宿村と云へる略語と見れば明神遷座の謂れも舊一邑たるの故なるべし凡神號地名を呼ぶもの尤多し又神社の名を以て稱する所もあり往事邈焉たり事實考へ難じと雖勝宿の神と號するは村有て後の神號ならん神名帳知彌神社とあれば此地に遷り玉ふと云ふも久しき事なるべし○明星か鼻 村より上の山端の名なり野溪山の南にて一段ひくさ山上平に龜井武藏守殿の墓所とす雲龍寺の記録を見るに讓傳寺九世宗恕和尚或日黎明戸を開て坐す時子丑の方に當りて明星數星を引て降る禪師往て其所を見るにウタハの下篠竹山の麓なり澗水少間金色あり其より其地を明星谷と云ひ其流れを明星水と云ふ禪師思らく上世和州玄真按よ延鎮僧正と云

者金色の流光を見て音羽山に沂り其所に於て茅を覆有力の外護を待て清水の伽藍を建つ予亦大同の嘉例にならひ此地に艸を挿し殘生を保んとて踞すと以下略す按するよ宗恕和尚は弘治以降天正より元和の間の人なり龜井武藏守殿歸依僧にて今三十餘石の寺領は此和尚の時寄附せられしなりと云ふ然らば明星か谷の名は久しき事にあらず又土人の云へるは是は往古勝宿明神鎮座ありし所なるを以て明星か鼻と云ふなり然るを明星か鼻或は名字か鼻とも訛り云ふなりとも云へり何れか是なるを知らず○龜井武藏守の墓 右に云ふ明星か鼻にあり本道は山の後山ノ宮村の方より登る石碑南向にして高さ一丈許り二重臺座にて上の石垣方二間高さ一尺餘下の石垣三間半四方高さ五尺玉垣方四間高さ五尺なり但し木にて作る法名中山道月大居士と碑面彫刻せり本姓は江源佐々木氏なり本雲州玉造り湯の住人なるを以て初名湯ノ新十郎國綱と稱す尼子家の浪士にて元龜二年當所に來り山ノ宮村の百姓井村覺兵衛と云もの家に寄留せり時に十七歳也井村も舊雲州の浪士にて同國の因みあるを以て之を養育す其後山中鹿之介幸盛か婿となり尼子の舊臣龜井氏の家を相續して龜井武藏守茲短と改む天正の初秀吉公に屬し軍功に因て氣多郡一郡を賜り鹿野の城主となる慶長中東照宮より高草郡を御加恩有て兩郡主に封せらる同十七年壬子正月二十六日五十七歳にて卒去ありしと也其初め明星か鼻に居宅を設けられし故其地に墓を築くと云傳ふ位牌は鹿野讓傳寺にあり委しく別卷圖式に見ゆ

○中園村 (土居鉢屋)

因伯叢書發行所

戸數二十二〇辻堂藥師氏神勝宿大明神(在寺内村)〇古城(號觀音山城)〇城主の古墳(在土居)〇寺内より五町下にあり其間に鞍懸けと云妙見の支村あり妙見村は是より下向ふ東の山下に有り又當村中園を妙見村とも云ふ土人の説區々にて其故を知らず按るに當村の内山際に妙見谷と云ふ所あり昔此地に妙見社ありし故なり今東の山下妙見村に之を祭る思ふに中古争亂の世に宮社此地に安穩ならず東の山下に遷座し●ふあるべし然れば此地舊妙見村の内にて鞍懸との間にあれば妙見の中園と云ふ義なるにや土人の説區々なるも其故ならん凡そ郷村里の名に東西上中下等の差別あるは必其傍に對する名義の村里あるべし然るに中園ありて其上下東西に比對すべき名の村なきは其謂れあるべし〇古城 村の後にあり觀音山と號す木梨子村藤山の出城ありと又東の山下土居と云ふ支村有り民家の後園竹林の中に古墳あり大なる五輪三基あり一基高さ六尺一寸二基は蓋石と臺座のみあり是皆觀音山城主の墓と云傳へたり此地を土居と云ふは觀音山の構へ土圍の内と云へり安永年中民家を建ける時土中より鯨の肉を穿出しけると

(古城の部に詳なり)

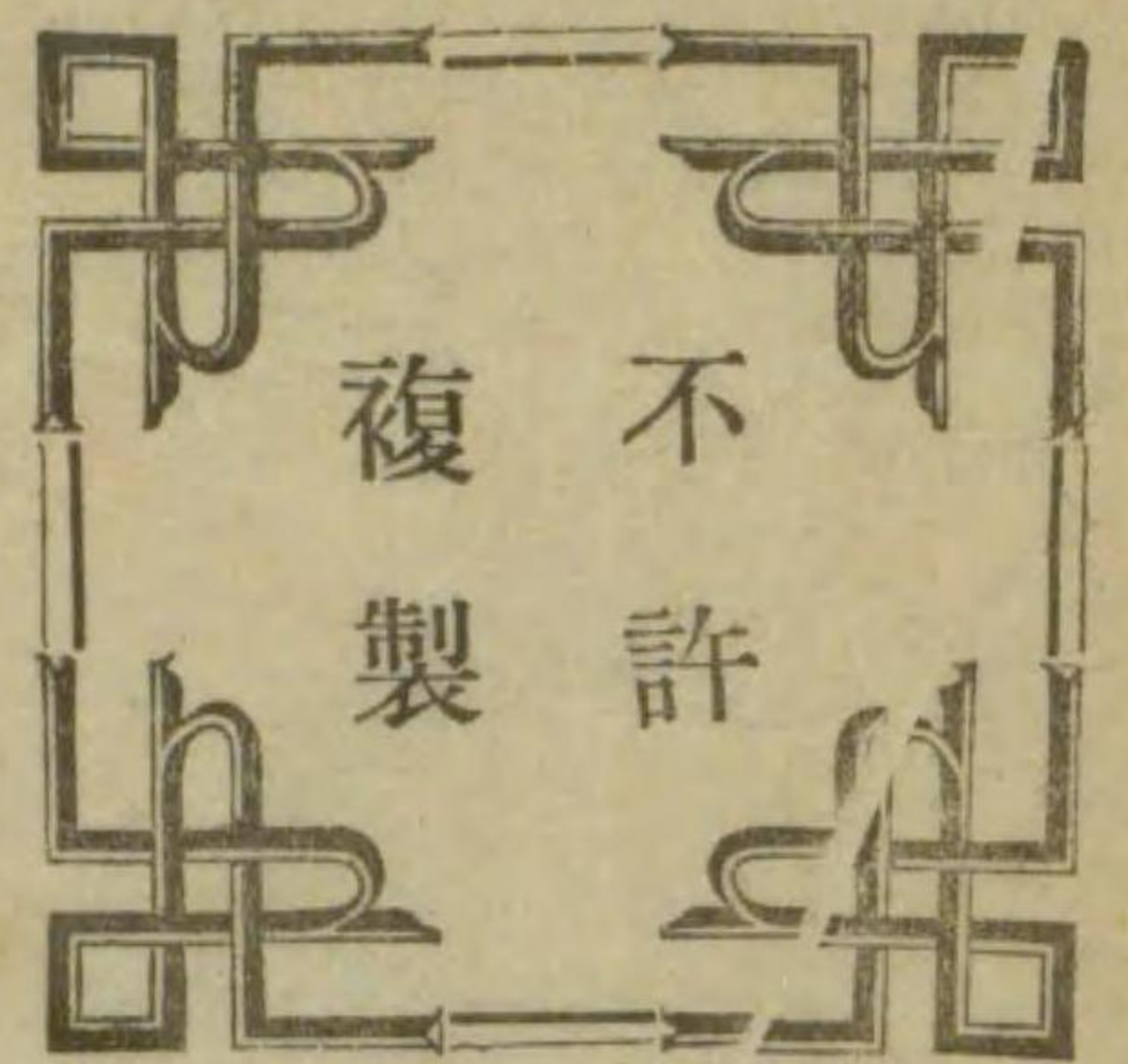
〇妙見村 (鞍懸)

戸數二十三〇氏神勝宿大明神(在寺内村)〇同妙見社(社領五石四斗)〇中園の下十町餘にあり東の山下に屬す或は官方村とも云ふ古き御圖帳に妙見谷村と見ゆ是舊中園の内妙見谷にありし故なり

大正十年十二月十三日印刷

定價 六拾五錢

大正十年十二月廿三日發行



不許複製

編輯兼 發行所 鳥取縣東伯郡倉吉町大字東町五拾四番屋敷 佐伯元吉

印刷者 鳥取縣鳥取市上魚町二十番地 矢谷仙太郎

印刷所 鳥取縣鳥取市上魚町二十番地 矢谷活版所

發行所

鳥取縣東伯郡倉吉町大字東町五拾四番屋敷佐伯内

因伯叢書發行所

鳥取市上魚町 橫山書店

倉吉西町 徳岡書店

米子尾高町 今井書店

大賣捌

128
240

128
240

